
ゴキブリ

杉谷 聡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴキブリ

【Nコード】

N3411S

【作者名】

杉谷 聡

【あらすじ】

アメリカはスラム街

ストリートチルドレンとして日々ごみをあさる彼は、自分の事を【ゴキブリ】になぞえる。

そんな彼の半生を描く

ゴキブリ

・アメリカ、誰もが知る夢の国、僕はそこにいた。

といつても誰もが憧れるソコではない、スラム街の端、瓦礫に埋もれた廃墟ビルにひっそりと膝を抱えていた。ときおり通る人の足音が聞こえるたびに、ササッと影を隠す。

誰かが言った。

「なんか今そこにいなかった？」

「ああ、ゴキブリでもいたんだろ。」

ここに住んで(？)1週間になると思う。家はあった、でもそこに僕の居場所がなかった。父のことは知らない、母は外から帰ってくる、口癖のように毎日僕がいなければ幸せだとつぶやいていた。だから10歳の誕生日(といつてもいつ生まれたかなんて知らないから、勝手に自分で決めただけど)に家を出てあげた。

すごく暑い夜だった、母が行き先も何も言わず外に出て行ったのを、いつものように部屋の影から見送ると、自分用の薄い毛布を持ち自分も外に出る。寄せ集めの木でできた最後のボロ家の姿を目に焼き付けることもせず、意気揚々と敷居を踏み越える。不安ななんてなかった、なんていうつもりはないけど、だからといって何か困る事があるか？と考えたら、特に何も思いつかなかった。(メシは？)家にいてもなかったし、(寝るのは？)どっちにしろ地べただったし、(一人じゃ危ない)家にいたら母が守ってくれるとでも？(友達は？)・・・いないし・・・。家からここまで歩く間にいろいろな不安が僕の足を止めようとよぎっても、いとも簡単に打ちのめす事ができた。夜になると明かりがほとんどないこの町では、闇に身を隠すのに造作もなかったし、夜に子供が歩くのは別に普通のことだったから、まあずっと家にいた僕の事を知っている

人なんていなかったし、2時間ほど歩いたら思っていたより簡単に今の場所に着いた。といっても、目的地を決めて歩いてたんじゃなくて、ただ歩いていたらたまたまこの場所がみつかった。スラムの周辺にはこんな場所がいくらでもあるから、先客がいなけりや問題は無い。だから、自分のテリトリーにはそれぞれ「しるし」を残していく、夜、調達に行ってる間に場所をとられたのでは元も子もない。あの町ではそれは常識だった、算数や国語よりも先に誰とでもなく教えてくれる。僕には母が教えてくれた。出て行って欲しかったのか、万が一のためなのか、・・・たぶん前者だったのだろう。そう思わなければ報われない。

1週間、昔と変わらない暮らしが続く。昼間はビルの陰に隠れ、夜に、食糧の調達。ただこの繰り返し。いつからか自分の事がそう見えてしょうがない。誰かが言った【ゴキブリ】に。

【ゴキブリ】なんだかそのフレーズが気に入った僕は自分の事をこれからもそう呼ぶ事になっている。実際ゴキブリと一緒に生活しているし、かつこ悪いかもれないが、ヤンキーが自分の事を「悪魔」だとか名乗ってるのと同じ感覚で、そう名乗る自分がちょっとカッコよくも思えた。周りは普通のスラム街だ、そうだれもが知っている普通のスラム街があるだけだ。

だからチーマー、ギャングの類も多い、そこを普通に歩けるのもストリートチルドレンの特権でもある。もちろん節度をわきまえればの話。そこを間違えたやつがどうなるかなんて、想像もしたくない。いじめの類はあるかもしれない、でも殺されはしないのは分かっている。僕を殺しても一銭の得にもならない、それ以上の理由なんてあるのか。どうせ後始末とかあれこれ考えて実行するなら、それ相応の見返りを求めなくちゃね。

今のところソツチ側にいくつもりはまだない。憧れはあるけど、毎晩どっからか聞こえてくる銃声に膝を抱えて震えている僕には、まだソコには。

さて、メシメシとすっかり夜が更けたのを見計らって、立ちあが

りつつ膝と尻についているホコリを落として伸びをする。ウーンと！ この生活にも慣れたといったらおかしいだろう、でもずっとこんな生活だったんだ。昼間外に出るのは家の周りだけ、誰かがきたらサツと家に隠れる。母からそう教えられていた。メシの調達方法も昔と全然変わらない、ただコンビニやファミレス、メシ屋の裏にあるゴミ箱をあさればいい。もちろん誰かのテリトリーを侵さずに。そういった生きていく術は母から実習を受けていたようなものだから。ものごころついた時には、僕は母の後ろを少し離れて歩いては、それを真似ていた気がする。母がついてこいといった記憶はない、だがついて行かなければ僕にメシはなかったはずだ。そう思うと人間意外と賢いんだなと自分に感心したりもした。

ぶちっ、昔拾ったサンダル、紙一枚と対等を張れたゴム底がついただけの寿命がきれた。拾った時はすぐくうれしく、ずつと履き続けてはきたが、はつきりいって不便の上なかつた。走る事も出来ず、石を踏んだら裸足よりも痛いんじゃないかってゆうくらいに意味をなさなかつたそれも、いざ切れると少しさみしくもなり、解放された嬉しさもあつた。なんでもつと前に捨てなかつたか？ つて、野暮な質問だね、貧乏性だからさ（笑）。そうやって集められたものは意外と少ない、みんながそう、貧乏性だつたから。ゴミのない町として表彰してもらいたかつたよ。だからあのサンダル（さすがに捨てたけど）が拾えるなんて、初めて神に祈つたよ。「たまには仕事するんだな」つて。

昔の町とは反対方向に、廃墟ビルから二時間ほど歩けば、繁華街にでる、数キロ先からでも見えるまぶしいネオン、太陽も夜は寝かせてあげるよつて言いたくなるほどの。車の通りも激しくなる、さつきまで一台も通らなかつたゴーストタウンのひび割れたアスファルトを横目に、車はメイン通りに続く道を派手な音楽と派手なスピーカーを乗せて目指していく。これこそが、そう、アメリカさ。

この生活を始めてから、こんな世界を知つた。最初この場所を

見たときは少し、いやかなり怖かった。こんな大勢の、しかも多種多様な人間を見た事がなかったからっていうのもあるし、・・・後は何となく、そう、何となく。うまく言い表せないけどひとつは言える、僕にとつてここは楽しむ場所ではない。【ゴキブリ】には眩しすぎた、それだけだ。

でもここで新たな発見もあつた、元々ゴミを漁る事しか考えていなかった僕に、それはゴミ箱をあさるより効率もよかつた。僕と同じような子がそれをしていて、別にもつたいぶる程の事じゃない、ただの乞食だ。その子を見るからに金持ちそうな白髪の肥えたじいさんに話しかけていた。

「お金ちょうだい」

この町ではよくあることなのかもしれない、その金持ちそうなじいさんは笑顔で渡すと、一緒にいた若い女と、黒い車の後ろに乗り込み、走り去つて行つた。シヨックだつた。道行く人に、しかも声をかけるだけで金をもらえるなんて、前の家にいた時に攻めていた町では想像すらしなかつた。いやもしそんなことを言つたら、間違いなくぼっこぼこだつただろう。でもいいものを見た、とニヤリほほ笑む。それはすごく順調だつた。パンチパーマの黒人、元が白なのか茶色なのかわからない半そでシャツに身をまとつた、いかにもという僕が声をかける。周りに人が多く、女を連れられている白人男に声をかければ驚くほどひっかかる。その時は同類のやり方をこつそり真似ては経験で学んだが、思春期を越した時その理由も学べた。まったく男つてさ。

日々の平均収入は3ドルほど、もちろん一日で使い切る程の少額だつた。でもそれで十分、人があふれる華やかな店の中に入って注文する勇氣はなかつたけど、入つたところこんな汚いガキつまみだされるのが関の山だし。だから路上販売の、僕と同類出身のにおいがするレゲエな格好をしたドレッドヘアの黒人の兄ちゃんに売ってもらえるようにはなつていた。最初会つたときはチラツとも見ず無視されたが、お金があるとわかると普通に接客もしてくれ

た。

「おつ坊主、何が欲しい？ 金もってりや客だ、その金の出所までは追及したりしねえから安心しな。」

親からもらったおこづかいじゃない事はバレバレだったらしい、文字は読めないから、指を指す。

「OK、特製オリジナルホットドッグだ！ 冷めねえうちに食っちゃいな。」

アツアツのそれを受け取り、陽気な音楽がかかるその屋台の隣にちょこんと座って食べようと思ったが、

「そんなところにいたら邪魔、邪魔」と兄ちゃんに怒られたので、少し離れたベンチに座り、包み紙を破り捨てる。おいを嗅いだけでよだれがでる。見たことがあった、だから選んだんだだけど。よく覚えている。ファミレスのゴミ箱からこれを見つけ、

頬張った時の至福感を。でもこれはそれとは比べ物にならない。

熱い！だからおいしい！ そういえばあったかいものを食った事自体初めてかもしれない。ゆっくりゆっくり一口一口楽しむ、1週間毎これを頼む。昼間コンクリートにかこまれながら膝を抱え思うのは、一日一回あるこのホットドッグの事だけだ。

「よく飽きねえな、ほかにもオススメあるぜ」

すっかり顔なじみになった兄ちゃんにあきれながら言われても、ほかのを試す気はない。これ以上にうまいものなんてありえない、将来はホットドッグ屋さんになるう！とまで妄想したりもした。

現実という状況はそこまでおいしくはなかったが。

いつものようにホットドッグを思い浮かべながら、今日もネオン街への境目をまたごうとしたとき、急にまわりが闇に覆われた。

目を上に向ける事ができなかった。つまりそれが何だったかすぐに理解できたから。今思えば軽率だった。テリトリーのルールは知っていたのに、あのきらびやかな世界と、多くの笑顔にその警戒が薄まっていたんだらう。今それを反省しても、もう遅い。

「おいっ」

ビクツ、わかりやすいほど体が反応した。 恐る恐るこわばった顔とうるんだ眼を上にあげる、予想通り、自分より五つくらい年上の同類たちに四方を囲まれていた。 たぶんチーマーだ。 目の前に立っている頭にバンダナを巻いた男が鋭い眼光で僕を見下ろしていた。

「ちよつと来い、意味はわかるだろ。」

静かにドスの効いた声でそういうと振りかえり、歩きだした。

その意味はわかるが、思うように足が進まない僕は、後ろからドンと押され、前を歩く男の足元を追いながらそろそろ歩きだす、今押してきたのは誰なんだろうって確認する事なんてできるわけもなかった。

「でっ」

その一言にまた体がビクツと反応する。

「お前は何なんだ？」

思っていた通りの問いかけ、あそこからここまで5分くらいだろうか、前を進む足が止まったら終わる、（止まるな、止まるな）そんな願いは叶うわけもなく、予想されていた問いに答えをまとめる時間はすぐに消えた。

「えつと、あの、」

着いてから初めて視線を少し上げる。 どっかの駐車場っぽい、明かりはなく、昔の町を思い出す。 手の居所がうまく見つけられず腹の前で泳いでいる。 震えたままの足を止めようと意識しても、さらに震えが増してしまい逃げる事なんて絶対無理だ。

「おいっ答えるよ！」

右から怒声が飛ぶ、そこには自分と変わらぬ歳らしき子がいた。

「あの、ごめんなさい、この街に来たのは初めてで・・・ごめんなさい」

なんとか震える声押し殺して出せた、的を得ない答えに、もちろん納得してもらえないわけもない。 むしろヤル事ヤラレテ早く終わらせたいと、諦めも尽きつつあった。

「この街が初めてだ？」

さつきから5歩ほど離れた正面から話すこの男がきつとリーダーな
んだろう。

「だからといってルールを知らないわけじゃないだろう。 どう
見ても昨日までおぼっちゃまでした、と正反対のお前が。」

そう、だから言い返せる言葉なんてなかった。 ただ自分と同じ
歳くらいの少年に怒鳴られビビった拍子に、考えもなくでただけの
返答だった。

「まあいいや、ルール違反の制裁もわかるようにしておいてやれ」
以外と早くその時が来た事に正直ホツとした自分がいた、恐怖の
中での言葉攻めは思った以上に痛かったから、それでも、迫ってく
る周りの少年らの顔を見る勇氣はなかった。 胸に衝撃がくると同
時に気づいたら僕は真上を見ていた。 さつきまで見ていた地面と
は真逆の、月も星も見えない真っ暗な夜だった。

「イツ」体に走る激痛で目を覚ます。 ゴロンと仰向けになった
場所から見えるのはいつもの無愛想な灰色の天井だった。

「わかったか？二度目はないぞ」

最後に聞いたのは確かそれだったと思う。 その後ぞろぞろとみ
んなの気配がなくなるのを待って、腕で踏ん張り起き上がる。 尋
常ない痛みが走るが、そんなこと気にしている場合じゃない、とり
あえず早くここを去りたかった。 幸い、目も見えだし骨折もない
っばい。 たぶん手加減してくれたんだろう。 ひよっこりひよっ
こりと帰り道を歩く姿は、生まれたてのなんとかって言葉がピツタ
りだ。 復讐なんて考えはない、ルールを侵したのは僕だし、むし
ろこれで済んだのを感謝してくらいだし。

「さすが【ゴキブリ】しぶといな」

独り言をつぶやき、切れた唇がそれを許さない中ほくそ笑む。

闇夜に映えないこの生物は夢も希望もあるわけじゃなく、その時は
ただ生きてることに感謝していたんだ。 気づいたらいつもの場所

で体を丸めうずくまっていた。

「おなか減ったなー？」

何度か起き上がるうと挑戦するも、体から反応がない、そういや昨日はあのホットドッグ食べれなかったんだよな。今は朝なのか、夜なのか、何日寝ていたのか、瓦礫でかこんだ自分専用のスペースからは外の様子はわかりづらかった。記念日のつもりで記していた石で刻んだコンクリート壁への×印も意味をなさなくなったかな。とりあえず今日もこのまま寝ていよう。何も食わずに三日以上なんて今まで何度も乗り越えてきたんだから。後は体の許しをもらうまで・・・目をつむった瞬間に意識は飛んだ気がした。

テーブルの上には山盛りのホットドッグ、大喜びの僕にそれを笑顔で見つめハツピーバースデイと唄う母。わかっている、これは夢の中だ。神様も残酷だな、どうせ楽しい夢見せてくれるなら、もっと現実に近い付けてくれなきゃ。ううん、むしろ夢の中だからできた神様からの贈り物だったんだよ、それを妙にクールぶって気づいた僕が馬鹿なだけなんだ。それでどうする？このまま夢の中で楽しむ？それとも目を覚ます？夢の中で意識を持つと意外となんでもできる。きつと夢の中しか見たことない母の笑顔と、大量のホットドッグ。名残惜しいけど、さよならしなきゃ、それが僕の選んだ道だもん。なんでもできても、そこで僕の望む事はない。

決意した瞬間その甘美な景色は遠く離れ、眩しく白い光へと消えていった。ハツと目を覚ます。そこには変わらぬ灰色の天井が同じく灰色の壁と相まって雨の音を伝えてくれた。どうやら外は降っているらしい。仰向けのまま一筋の涙がほほを伝う。やっぱり神様は残酷だな、夢の余韻が現実の今に小さな針を突き立ててきた。それと同時に現実も知る事になる。相変わらず体はいうことをきいてくれそうにもない、それより何より、空腹感が異常なほどに襲ってくる。今まで味わったことない辛さから、ああったぶん3日以上経ったんだろうな、と無意味な結論もでてきた。このままではダメなんだと頭では考えるも、体がまるでこのまま死ん

でいくのを願っているかのように動かない。しまったなーあのまま夢の中にいたら良かった、と思ってもどうやらもう一度寝るのはちょっと厳しそう。鳴ることさえしない腹は痛みを伴ってきて余計に苦しい。ほんとやべーよな、独り言をつぶやいたつもりが口すら動いてくれず、言葉として外には出て行かなかった。なんでもいいから口にいたい！昔ファミレスのゴミから回収した赤茶色い生肉、匂いに少しためらいながらも飲み込み、一日もがき苦しんだあれも今は愛おしくてしょうがない。

パラパラパラ、四方八方からコンクリートを反射してくる、けっして強くない雨音に、イライラがつもる。

カサツカサカサカサ、そんな中雨とは別の音に気付く、ゴキブリか……。だんだんこつちへと近づき、自分の体に這ってきたのもわかった。（そうか、僕が死んだら食うつもりだな）、とうとう顔にまで上ってきた。傷跡もあって、こそばさと痛みがさらにイライラを増させる。いやな考えが頭をよぎる。でもそう思った時にはもう遅かった。

ジャリ、一噛み目いけるかも、ジャリ、二噛み目、僕は痛みなどなかったかのようにとっさに上半身を起こし体をひねり、それを盛大に吐いた。もはや何の異物も含まれていない黄色の液体がその引き裂かれた物体に降り注ぐ。ゲホゲホッ、オウエ、嗚咽はでるがもう何も出てこない、これで胃の中は本当に空っぽになったんだろう。

その上から透明な滴がポツリポツリ落ちていく。

「・・・ヒック・・・ヒック、ママ」

自分でもどうしてでたのかわからないその単語と共に、この滴は止まる事なくそこに落ちていく。きつとこれがこの旅の本当の洗礼なんだ。僕はまた崩れるように仰向けに倒れた。

あの夢のせいだ、あんなことを口走ったのは。現実の母は僕に向かつて笑いかけることなんてなかったのだから、その夢の母に思いをさせたんだろう。そう自分に言い聞かせるようにする。そ

うしなければ、このままくじけてしまうのが目に見えていたから。

頭を横に向けさつき吐きだした物を改めて見る。4つに分かれたその黒いかたまりはもう動いてない。人間なんか捕まるくらいだ、あのゴキブリも相当弱っていたに違いない。(僕もこんな風に、こいつの隣で死んでいくのか)、そんなの死んでもヤダ！もう起き上がれる事を知った上半身を腕で踏ん張り起こし、まだ知らない下半身に無理やりいうことをきかせる。痛い痛い、なにやりボーっとしていた頭が急に鳴り始めた。

「ああつくそ！」

今度はちゃんと言葉になった独り言を足にむかつてつぶやき立ちあがり、勢いで後ろへ体を反らす。もう一度、今度は遙か上からそれを見下ろす。

「ありがとう、この事はきつと忘れない。僕は生きていくよ」
自分で殺しておいて何を言っているんだか、なぜかそのゴキブリには感謝の念があった。その中から足を一本もらい、穴があいてないポケットを確認しそつと入れる。これがあればこの先も生きていける気がする。そんな願いをこめ、「ゴキブリ」はまた歩き出した。今夜はどうやら満月のようにだ、あたかも新しい出発を祝福してくれるかのような光に照らされながら。

あれから新しい寝場所もすぐみつかっていた。あの後正直あの街に向かうのが怖かった俺は、いつもとは別の方に探索にでかける事にした。一歩歩くたびに体のどこからともなく痛みが走り、汗が伝うと傷にしみた。季節はまだ夏、ここで倒れたらまたしばらくは起き上がれないこの体にムチ打って歩かせた、夜の間にもせめて影をつくれるところへ行かなければ、このまま野垂れ死にだけは避けたい。

肩から下げた拾ったコーラのペットボトルから水を一口、腐つてもここはアメリカ、そこらへんの水道から水を出したってだれもとがめやしない。水でたぶんたぶんになった胃がもう水はいいと拒

否はしてくるが、何かを口に持っていかないと気が済まない葛藤の中、それでも歩みを止めることなく、まだ舗装されていない土の道の上を何も無い景色を横に、目だけは常に前を向く事でゆっくり確実に前へと歩けた。

その甲斐あつて素晴らしいものと巡りあえた、あれはもしや農園畑、胸から沸き出る何かをなしとげたかのような高揚感、自然と足どりが軽くなり、気付いたときにはその中にいた。木から垂れるオレンジの丸い物体、その通り、まさしくオレンジだ。

夢じゃないだろうか、そう思う前に垂れている枝からむしりとり、少し厚いオレンジの皮もなんのその、2・3個一気にほおばる。最高だ、同じ水ものでもこれには胃も満足なようだ。

満腹になりぐるっと農園を一周すると、少し離れたところに、木でできたちよつと古めの小屋をみつけ、中に入ってみる。中は真っ暗だ、一昔前のランプみたいなものが天井からつりさがっているが、さすがに点けると、自分が中に入っている事をわざわざ知らせているようなものだから、それはできないので、窓から差し込む月の光に任せなんとか目を凝らす。大股で歩いて5歩ほどの広さに鉄やカゴといった収穫用の道具、そして茶色いビンに入ったなんかの液体、多分これは飲まない方がいいな。机の上に紙が何枚か束ねておいてあるが文字を読めないので何とも、ふと視線をあげると壁にカレンダーが張っており、赤いペンで がぶつてある。(もしかしてこれが収穫日？でも今日が一体何日なのかわかんないし) 気にはなるも、ま、明日じゃないことを願つて、と楽天的に考え小屋の端に陣取り、木でできた床の上に寝転がる。(そっぴや毛布持ってくるの忘れたな) 不思議なものであるの恐怖が逆に変な自信をつけさせていたのもあるのかもしれない。警戒していたはずが、俺はまたすぐに落ちるのが感じれた。

小屋に唯一ある窓から差し込む光が、小屋の中を反射して顔に当たる。相変わらず体は痛むものの、起き上がるくらいの痛みには慣れ始めていた。さてと、とりあえず今日からの目標が一つでき

た。この丸印がいつかつて確かめることだ。明るい中で改めてそのカレンダーを見てみると、大きく7と書いた見出しの下に並べられた31までの数字の中で、7・14・21・28の縦一列にがふつてあるのがわかった。もしこれが予想通りの印なら大して苦労はしなくていいんだけど。痕跡残してないよな、と小屋を見渡してはいったん外に出る。見た目より軽い木のドアを開けオレンジ畑の方を見ると、何だか昨日と違う雰囲気だったが、（朝と夜じゃ印象も変わるよな）と納得した。明るいところで周りを見ても特に町がある気配はない、ってことはこの主は車で来るはず、道路とは逆の方向にある岩陰から小屋の様子をうかがう。時折サ―ッと草が流れる音と共に連れてくる風が、体を優しく触り気持ちよかった。

その日も、次の日も、また次の日も誰かが訪れる気配はなく、車も一日に一回通るくらいで、ここだけ時が止まったかのように平和なまま1週間は過ぎた。

（なんかおかしいな）木の枝に上りいつものようにオレンジをほおぼる。もう体は十分回復してこんな木のぼりくらいは文字通り朝飯前だ、実際は夜飯前だけど。全然収穫に来る様子がない食べ終わった皮を土の中に埋めながら考えていた。収穫の時期がいつかなんて知らないけど、これだけきれいなオレンジ色をして、こぶし二つ分大きくなったオレンジは一番食べ頃に思えるのに。まー来ないに越した事はないんだから、本来は喜ぶべきはずなのにこんな心配してしまうのは、昔の町で学んだ「自分が食う分を取ったら後は次の人のために置いておきなさい」といった所からきているのかもしれない。もちろんそれはゴミ箱の話だけど、なんでだろうか、やっぱり自分一人で独占している感じは好きになれなかった。

一か月が経ち、オレンジも半分以上が下に落ち腐り始めている。ここの主はとうとう来なかった、そしてあのカレンダーは多分役に立たない事はわかった。

この時季しかここは使えないのは、おおむね予想はしていた。

この一カ月遊んでいたわけではない、痛みがとれた頃から今度はこの小屋を中心に探索は続けていた。道路の造りは本当に複雑なもので、あの時別の方向に向かって歩いていたらつもりが、この場所を発見せず、痛み到我慢しつやつつとたどり着いたのがまたあの街になるなんて、その時の俺ならその場に崩れ去り発狂していただろう。そうこの道路を行くとまたあの街に辿りついてしまった。遠目でもそれがわかった瞬間その日は逃げかえってきた。

なにより凄いのがこの小屋周辺2時間ほどは、あの街以外見当たらないという事。何が凄いつてそんなのわからない、ただその事実がわかった時に皮肉も込めてそう思ったに違いない。ほんとにただただ凄い。

その残念な事実がわかった時、それからどうするかなんて腹の中では決まっていた。あの時、ゴキブリの残骸を見ながら決意したのは逃げぬく事じゃない、この道がああ街へ続くのもきつと俺が進むべき運命なんだから。ポケットにまだ残るお守りを眺めては再び誓う。俺は生き延びてやる。

それから2年が経った。俺は相変わらずの生活を送っていた。オレンジ小屋からの往復の日々、やってる事は以前とまったく一緒だ、もちろんもうあのルールは破らない、つもりはない。そのためにいろいろと勉強をした。おそらく人生で初めての勉強というのを、といつても机に向かってペンを走らせてたわけじゃない。ただ見ていただけ。昼間にも街に足を運び、人をひたすらみていた。そうすることによって何となくこの街のルールも分かり始めてきた。テリトリーは昼と夜できれいに分かれている、昼間はまさしくホームレス（人の事いえないけど）といった老人が路上に座り物乞いを行い、夕刻、多分この街の名所っぽい赤茶けた古いレンガで造られた、いつ倒壊しても不思議でない時計台が出す18時のブーンという報せと共にその老人たちはどこかへとはけていく。

みんなどこに行くんだろう？そう思った事もあるけど、行動にはださなかった。もし自分がそっちの立場なら好奇心でつけてきたガキなんて殺したいくらいだから。街を歩いていると誰かの声が聴こえた、歳をとったホームレスはプライドだけは一人前だから困ると。

それから街は、20時までそういった類の者は姿を現さなくなる。なぜかはわからないがこれもルールの一つらしい、そして20時の報せと共に、今度は俺の同業者やチーマー、ギャングが動き出す。これまたどこから沸いてきたのだろうかというほどに。その中であいつをみつけた、あの時リーダー以外で唯一顔を見たあの俺と歳が変わらないらしき子が、数人の少年らと一緒に闊歩している。チャンスだった。俺はあいつの行動を遠巻きに観察することに

した。万一看つかって追いかけても50Mは離れたこの距離からならば、物心ついた時から毎晩数時間歩いて鍛えられた自慢の足なら、優に逃げ越す自信はあった。もちろんその時にはあの怪我は完治して万全の状態でいたからでた自信だ。

ビルの陰に隠れ、決して近づきすぎずあいつと判断できる距離を保ちながらその背中を追い、今日はあの角まで、今日はあの店まで、それを一月ほど繰り返しようやくやつらのテリトリーが把握できた。見ていた限りあいつらがおそらく下っ端で、見回りを行っているのだろう。あいつらの後に回ってくるやつらはおらず、一周回った後はチームのやつらと合流し酒やたばこをふかし、くっちゃべっては、しばらくしてまた見回りを開始するみたいだが、最初の一回目の見回り以外は特に時間を決めてるわけではなく、いつもバラバラだった。

おそらく俺が最初にこの街にきた時は図らずもその空白の時間に行動していたのだろう。それが運がよかったかどうかなんてわからないけど、少なくとも1週間は、今も同じ場所であのレゲエな兄ちゃんが屋台を開いているホットドッグを、食べていた事は感謝すべきなんだと思う。

そしてあの時の俺に見本を見せてくれたあの子もいまだに健在である。一体どうして？答えはすぐに分かった。見回りのやつらが来た時にその子はすぐに近づき挨拶をすると、何かを手渡ししていたのが見え理解した。（そうか金か）その金が見回りへのものなのか、そのテリトリーを統べるチームへのものなのか、まあ後者なはずだ。それを行っている子は何人もいた、そこから少しがめるくらい容易だろうけど、そんな馬鹿な事俺でもしない。たった一度しか会っていない俺が、あのリーダーはすべてを見通せる、そんなオーラをだしていた彼が、かなり聡明に思えたからだ。

あの日その場で捕まらず、次の日待ち伏せされたのは、あの同業者の中の誰かが見回りに密告っていたのかもしれない。別に恨んではない、遅かれ早かれバレていたし、あのリーダーがいない場所であいつらにからまれていたら、もつと危険だったかとも思うと俺はつくづく運がいいんだなとすら思えた。

夜も明けてくると今度は夜の集団がまたどこかへとはけていく、この時間になると時計台もあの音をだしていない、夜9時から朝7時まではストップするようだ。

だがこれが大きな発見だった。夜の集団がはけるのに規則性はなく、みな思い思いといった感じがあの朝のホームレス達の規則性を引き立たせたからだ。ホームレス達が集まるのが大体7時過ぎくらい、こっちもバラバラだった。つまり、この時間帯にはルールはない！はず、それに気付いたのが大体1週間、もちろんそれは前にターゲットにしていたお金をくれる大人達もない時間ということだけど、じゃーどうする？ 簡単さ、昔からの十八番のゴミあさり以外何があるっていうんだ。だからといって大抵の物は先客に取られている、これだけ物が豊富な街で俺らみたいなのがそれを放っておくわけがない、そいつらは一体なにをテリトリーの主に渡しているかは知らないが、あれだけ堂々とみんなの前でやっているからには何かはあるんだろう。

でも、それでもちゃんと探せば、少しは残っているのはさすがこ

の街、としかいいようがない。前の町のやつらに教えてやりたいくらいな出来事だよ、ここに樂園があるぞ、ってね。いやあの町だってスラム街だ、生まれてからずっとそこで同じ暮らしをして過ぐすやつなんてきつとないだろう。この街に住んでいたやつが何らかの事情であんなスラム街に住まなければならなくなった奴だって少なくともはないと思う、だからこそルールの厳しさを人一倍知ってるからこそ近づかない奴、自分のように制裁を受けて近付けなくなった奴、そうなる人数人でひとつのゴミ箱をテリトリーにしていたあの町は以外といい町だったのかも、と少し苦笑してしまうのは困った。

この街にはほかにもたくさんチームとテリトリーがあるが、あえてあのチームとそのテリトリーにのみ絞って調べ上げた。ただあいつらに一矢報えればそれでいい、実際テリトリー内で黙ってゴミを漁っている自分が少し優位に立ってるつもりでいるくらいだ。でもそれだけじゃない、この戦いで勝手に自分が決めたもう一つの勝利条件、もちろんそれはあのホットドッグを食ってやる事他ならない。

そして2年の月日は重ねた今日それを決行する。さすがにもうぼろぼろになって、粉みたいになってしまったお守りを、ポケットの中で手にこすり腹をくくる、不思議と心は落ち着いていた。あの日と同じくらい暑い夏、月も星も見えない、【ゴキブリ】には最高の夜だった。

調べに調べ抜いたこの時間、見回りも来ず周りの同業者も消える空白の時間がある。あいつらのテリトリー内に足を力強く静かに踏み入れる、自分の中にだけ大きくドンと響くように。何度もシミュレーションしたこの風景もいざ目の当たりにすると、その空間の大きさに圧迫されそうな勢いで迫ってくる。

でもそんな感慨にふけっている場合ではない、この空白の時間は余裕をもって20分とあったところだ。ターゲットは三人いる、一人目、黒のスーツに身をまとった20代といった金髪の白人兄ち

やんに声をかける、なにも言わず手で振り払われた。二人目、女連れの太った親父に、こいつなら100%だと思っていたが、まさかの女の方から拒否をされ、男はされに準じて行ってしまった。くそっビッチが！ 気を取り直し三人目、あれっ三人目は・・・やられた、振り向いた所にそいつは見当たらず、どっかに行ってしまったみたいだ。（くそっ、いや焦るな焦るな）そう自分に言い聞かせるも心音だけは上がっていく。時計台の針はタイムリミットまで刻々と進んでいる。

そこへ目の前に黒塗りの車が止まり、運転手がいかにもといった夫婦を降ろす。今度こそは、声をかけた瞬間冷や汗が流れた、その夫婦越しに同業者の姿が、こちらには気づいていない、けどここに向かつてきている。夫婦は突然しゃべりかけた俺を見たまま次の言葉を待っているかのように止まっている、これはいける。

「お金を下さい」

いつものセリフ、慣れているんだろうポケットから数枚のドル札に感動すら覚える。お礼をいい踵を返してすぐさま移動する。

（気付かれたか？）後ろを振り向けばばれる確率が高い、そのまま平然を装い歩く、目的地はそうあのホットドッグ屋だ。

昔と変わらず陽気な音楽を流すその屋台の前に立ちお金を渡す。

「OK、特製ホットドッグだな、熱いうちに食っちゃいな」

うたい文句も昔とほとんど変わっていない、どうやら俺の事は忘れてはいるみたいだけど。紙を破り一気にむさぼり食う。（この匂い、この味、やつぱ最高だー！）

「おいっ」

聞き覚えのある声が後ろからした、あの見回りのあいつだ。同時に振り返ることもなく一目散に走りだす。（まだ見回りの時間ではないはず、つてことはやつぱり密告りか）人ごみをかきわけ逃げる、逃走ルートなんて真っ先に下調べ済みさ。加えて毎日数時間歩いて鍛えた脚にはあいつらも追いつけるはずもなく、気がつくとも郊外へと逃げ切り後ろを振り向く。誰もいない、（勝った、

俺は勝ったんだ！）歓喜に浸りたいがそれは後のお楽しみだ。いつ追いかけてきてもおかしくないこの道を外れ、道なき道を遠回りして小屋へと向かう。喜びのおかげか、遠回りしたはずなのに、いつもよりも早く小屋に着いた気がする。小屋には入らずあの岩陰から様子をうかがう、これなら万が一あいつらがあの小屋に気づいても、生活臭のしないあの小屋ならスルーするだろうし、冬の間に使っていた毛布とかも全部この岩陰に隠しておいてある。それはあいつらのためだけではなく、小屋の主対策でもあったんだが。ふうつと腰を下ろす、手と足がまだ震えている。恐怖からじゃない、やり遂げたという達成感からだと自分でも実感していた。ポケットに手を入れお守りに触れる、「やってやったぞ、【ゴキブリ】が机の上のメインディッシュを食ってやったんだ」「くくくつあははは」「こらえきれずに体全体で笑いだす、地面の上を、体をうずくませ、声を殺しながら、転がりまわる。その日は眠れそうになかった。

きつと夢を成し遂げた人っていうのはこういう気分を味わったんだろうな。結局一睡もせず、むしろ来るなら来いと興奮やまぬ状態で岩の周りを右往左往して時を過ごしていた。朝日がゆっくり目に入り、ふと我に返る、「さーこれからどうしよう？」もうあの街には行けないし、今はまだ自然にオレンジが生るこの場所も、あの街にしか行けないのでは新しい寝場所を探さなければいけない。この事について考えてなかったわけではない。でも正直あの作戦がうまくいけば、見つからずとできるだろうという甘い考えも持っていたのは否めない。考えてても埒があかないや、と覚悟を決める。今回の一連の発端となったあのやり方も、街で誰かがやっているのを見て学んだんだから、また次の街に行けば新しい何かを見つけられるだろう。もとより人生経験の少ない俺がこんなところで考えてたってわかるはずないのだから。

オレンジの生ってる間くらいはまだいてもよかったかな、歩きだ

してすぐに弱気な意見が出てきた。思い立ってすぐに行動にでた
はいいがこれじゃ先が思いやられる。持ってきた物は水とオレン
ジ数個と毛布一枚だけ、毛布だけはかさばっても持ち歩きたい、そ
れほど重要なものだと思ってる。

前にも探索していたのでしばらくは街が見えてこないのは覚悟済
みだが、4時間ほど歩いて何も見えてこないとなると少し気がめい
ってきた。「あちー」それに加えてこの夏の日差しの暑さ、節約
はしているもののペットボトルいっぱいにしておいた水も半分を過
ぎていた。

昨日の今日ともあって、道路より少し離れた所を道なりにひたす
ら歩いている。(メンツをつぶされたんだ、車使つても追いか
けてくるかもしれない) その分、舗装されてないでこぼこした道
が、さらに体力を消耗させてきている。何で夜にしなかつたんだ
よ、また弱気な意見がでたところで、近くにあつた木の陰で休憩を
とることにした。

夏の日の木陰で、一陣の風がサーっと体と耳を抜けていくのは、
ほんとになんとも言えないくらい気持ちいい。その心地よさに疲
れと昨夜寝てないのも効いてつい眠りについてしまった。まあ少
しくらいは……。

ブロロロツ、心地よい空間につかわしくない音が大地を伝う。
ハツと目を覚ますと、道路から離れてはいるものの、見えないわ
けじゃない木の裏に隠れるようにはりつく。珍しく通った車の音
が、忙しく過ぎ去っていくのを聞いて、パンとほほをたたいて気合
いを入れ直す。

ダメだ、休むのはもっと安全な場所を探してからにしなければ。
高鳴った心音とは違い、休息から急に目覚めさせられた、けだる
さを残したままの体に喝を入れもう一度歩き出すと、緩やかな風が
それを応援してくれるみたいに後ろへと吹き抜けていった。

その甲斐あってようやく街が見えてきた、何時間歩いたんだろう
か、朝にでたはずなのに、もう陽は暮れる方へと傾き始めていた。

とりあえず水を補給しよう、節約しておいた水も口かりこぼれるほどにその場で一気に飲み干す。

前の街ほどの華やかさはないがこの街もなかなか立派なものに感じれるのは、やはり車や人の多さからなんだろう。逆に同類も少なく感じるのは汚れない街という雰囲気をかもしだしているからと、いい意味で金持ちが遊ぶために集まって来そうには見えないのを、街に入った瞬間なんだか感じ取れた。

水補給のためさっそく自由に使える水道を探す、ランニングしているお姉さんや、大きな犬を子供と一緒に散歩しているおばさん等、自分には似つかわしくないアットホームな感じの割と広い公園が街の真ん中にあつた。

公園ならどこにでもあるような水飲み場から、蛇口をいっぱいひねり、水を補給した。できれば体も洗いたいけど、さすがに人が多すぎる。足も疲れていたが、そのための時間潰しも含め、寝場所として利用できる所があるかもしれないから、ぐるっとまわってみることにした。

木や池などがところどころにあり鳥のさえずりが聴こえてくる、やっぱりここは憩いの場としてみんなが集まってくるのもわかる気がして、関係ないのに少し嬉しい気分にもなれた。そんな中、そこに似つかわしくない？同業者？いや違う、自分と同じ感じを受け気がしたけど、むしろそこにピツタリだと思ってしまうほど不思議な感覚をだす老人が池の前に座っていた。不思議な感覚を覚えたのは、今まで見た彼らとは違い、彼は空を見て堂々とその場に陣取っていたからなのかもしれない。

（何をしているんだ？）ゆっくりと近づいて行く。近くに行くのと紙の束とペンと小さな椅子が置いてある。何だこれは？気にしてない振りをして通りすぎようと思ったが、つい目があつてしまった。思わず足が止まる、しまった、と思いつつも足が前へ行かない。目が、あの時のリーダーとは違う、結果は一緒だけれども、あの時とは正反対の穏やかな目が俺の足を動かしてはくれなかった。

「座りなさい」

長い、いや実際はほんの少しの沈黙の後、老人が椅子へと促してきた。言われるままに座った自分に、くだらない敗北感を感じ、つい強めに口を開く

「何だよ一体、あんたここで何してんだ」

「いいから黙って座ってなさい」

地べたに座りながらも自分より優位に進める感じもまた癪に障った。横に置いてあったペンと紙を取り出すと、老人はまたこつちをじつと見てきた。「同類じゃよ」「えっ、と聞き返す

「さつき質問しただろ？わしもお前と同類じゃ」

「いや違う、あんたは俺らとは違う。うまく言えないけど、あんたは何か違う」

言われた通りじつと座ったままで反論する。ジツと俺の顔を見ると老人はペンを走らせた。それからしばらく沈黙が続く、最後に言葉を発したのは自分なのに、勝った気がしないのは癪だった。

10分後老人がペンを置く、やっとか、言うことを聞いてジツと座っていた自分に、今更ながらため息がでた。

「ほれ」

渡された紙を見ると黒一色でやけにリアルな顔が描いてある。

「なにこれ、俺の顔じゃん」

あまりにもうまいそれを見て当然の感想を出す

「わしがやっているのはこうやって、望む人の顔を描いて商売にしているだけ、後はお前らと一緒にじゃ」

商売と聞き、金はないぞと咄嗟に紙を返すそぶりをする。

「わかっとなるわい、それはお前へのプレゼントじゃよ、ようこそこの素晴らしき街に」その時見たその老人の笑顔はとても優しく穏やかだった。

とりあえずこの街のゴミ箱のテリトリーや、同業者のやり方を学

ぶために、前の様に街を徘徊する。公園なら寝泊まりするのに全然問題はないことをあの老人に教えてもらい、公園の中にある木々の隙間に自分の場所を作り、そこに荷物は置いてきた。毛布もあるの絵も。

思っていた通りここに同業者は少ない、その分得るものも大きい。が、ひとつ今までにはないやっかいな問題が現れた。

「君、見かけない顔だけど何してるんだい？パパやママは？」

街を探索しているとふいに男から声をかけられた

「ちよつと買い物をママに頼まれたんだけど、引越してきたばかりでスーパーの場所がわからなくなっちゃって。まったくママは人使いが荒いつたらない」

うまくごまかせたかはわからないが、その男はスーパーの場所を教えてくれると、遅くならないようにと念を押して帰って行った。驚いた、まさか警官に声をかけられるとは思ってもみなかった。

確かに天敵みたいなものだったけど、俺らみたいな小者、今までの街でならスルーされていたはずなのに。

何にしろ、これから少しやりにくくなった、引越してきたなんて嘘、警察に二度も三度も通用するなんてありえないし、この旅の終焉が家への強制送還って……。どうせもうあの家と町には俺の居場所はここよりないんだから。

公園に戻りあの老人を横目に、周りの視線がないことを確認し隠れるように自分の場所へ戻ると、戦利品を出した。賞味期限が切れただけの未開封のホットドッグ。この街もある街もなんてこない物を捨てるんだろ？俺が店員なら持って帰って食うな。

一気に食っては、これが暖かければ言うことないんだがな、この街の居心地の良さに贅沢を言えるほど心に余裕が出来てきていた。でもあの老人はあれで商売が成り立っているんだらうか？一か月ほど経ちふと疑問に思う。街の公園に来るメンツなんて大概同じ人だから、一回描いてもらえば似顔絵なんてそうはいらないだろうし。それでもいつもあの老人の前には人が座っていた。今まで

ほかの同業者の素性なんかまったく興味がなかったのに、不思議なほどあの老人に惹かれている。ある雨の日、何の役にも立たない一枚の紙に描かれた自分の顔の絵を、雨に濡れないようにしている自分が滑稽とはおもいつつ、その動きを止めない自分の意味が見いだせなかった俺は、もう一度彼の前へと向かっていった。

「久しぶりじゃな、前あった時より元気そうで何より、もう一度描いてほしいのか？今度は金をもらうぞ」

前と同じように、促されるがそれを無視し老人の隣に座りこむ。

「あの時はどうも。今回はあなたの隣でああなたの事をただ見ていたいんです」

この老人には虚勢を張って自分の立ち位置を創る必要がないのもうわかっていた。

「はっはっはっ、これまた珍しい。はつきりいつてこんな老人の一日なんてつまらんぞ。それよりあそこでキャッチボールをしている男の子達に混ぜてきてもらったほうがよっぽど人生の役に立つぞ」

開けた芝生の上でキャッチボールをする同年代くらいの少年達がいる。でも

「いいんです、あなたが思っているほど子供は子供じゃないんだ。

俺とあの子達ではきつと・・・」

うまくいかないのは知っている。まだそれがわからぬ子供のころ、俺はそれを試し後悔した嫌な思い出もある。その頃から俺は人がきたら隠れるようにして過ごしてきた。あの頃に比べ、俺は強くなったけれどそれでも・・・。

そうか、と老人は黙ってまた前を向いた。暖かい日差しの下、風が深緑の木々を演奏し、後ろの池からは魚の跳ねる音、そして自分とは別次元の人々の笑い声が奏でるこの公園の音色。その中で過ごす時間の流れはとても穏やかに感じれた。

老人はおもむろにペンをとると紙に走らせた。

「お客さんいないよ」

「いや、いつもの常連さんじゃ」

ふつと紙と老人の視線を覗き込むとどうやら前の木の枝にとまった小鳥を描いているように見える。けれどその小鳥はすぐに飛び立ちどこかへと行ってしまった。俺はそれを首が動くところまで目で追っていく。

「あゝあ、いつちやったね」

残念という感じに振り返る、だが老人は手を止めることなく、さつきまで小鳥がとまっていた枝をずっと凝視してはペンを走らせ続けている。(何だ描いていたのは鳥じゃなかったのか) 気になっ
てはいたものとりあえず完成を待つ事にしよう。

落ちている小石を目標もなく前へと放っていると老人のペンがとまった。ほれっと渡された紙を見ると、なんだやっぱりさっきの小鳥じゃないか。

「うまいですね、でもどうやって？すぐ飛んでいつちやったのに」
さすが出来栄えはすごかった、自分の似顔絵の時と同じで黒のペン一色で、小鳥が枝にとまって首をかしげている様子が忠実に再現されている。紙をめくっていくと、確かに常連さんらしい。

「どうやって、か？」

いろいろなシチュエーションで描かれた、多分同じモデルだと思われる小鳥の絵をパラパラ見ていると老人が聞き返してきた。

「今いいですか？」

その答えを聞く前に一人のスーツ姿の女性が椅子に座って尋ねてきた為、中断されてしまった。大丈夫ですよと老人がジエスチャ
ーをするので、紙を返して待つことにした。

「今日はかわいいおぼっちゃんがいるのね、お孫さん？」

目を見てかわいいと言われたので、なんだか恥ずかしくなって目を背ける。

「まーそんなもんじゃ」

ウフフとっては世間話を二人で始めだした、どうやらこの女性もここの常連っばい。

10分くらいして老人はペンを置き、紙を一枚破って彼女に渡した。

「いつもありがとう、おじいさんの絵を見るとなんだかすごい自分に自信が出て、仕事の嫌な事も頑張れる気がするの」

はいつと終始笑顔だった彼女は10ドルほどわたして去って行った。

「今の絵おかしくない？」

隣ですつと見ていた俺には少し納得しないものがあった。

「いくらなんでもキレイに描きすぎだよ、あの人そんなに」

ブロンドのロングヘアに白い肌と青い目がまさしく白人女性という彼女だったが、お世辞でもそこまではいえない女性だったのは間違いない。

「めつたなことは言うもんじゃない。少なくともわしにとってはあの人はとてもキレイじゃよ」

俺が首をかしげる

「さつき聞いてきた質問があったな、つまり今のがその答えじゃ」

「さつぱりわかんないよ」

お姉さんにお世辞で絵を描くのと、鳥が飛び立つ事に意味なんてあるのか？

「ではこれならどうじゃ？もしあの鳥が飛び立たずにあの場所にくれてたでしょう。この絵の形ですつと待っていてくれると思うか？」

答えを誘導されると腹が立つもので、黙って首を振る。

「その通りじゃ。ならどうするか？簡単じゃ自分が描きたいと思ったその一瞬のシーンを頭に切り抜くのじゃ。それを紙に写すだけ、お前はずつとわしの絵を見ていて彼女を見ていなかったらどう？今度よく見ていなさい、彼女の笑顔はとてもキレイじゃ」

わかったようなわからないような顔をしていると老人は更に続けた

「世の中には二通りの人間がある。人のキレイな部分を見つけれ人間と、人の汚い部分を見つけれ人間じゃ。どっちが正解と

はいわん、わしも多くの人間を見てきた、お前が生きている世界ではむしろ人の汚い部分を見つけていかなければ生き残れないのもあるだろう。後は自分で経験しなさい、そしてよかつたらその答えをいつか教えてくれないか」

それから陽が暮れて老人が帰るまで隣で絵とモデルを見比べてはみたものの、どうも商売のために少し美化して描いているようにしか見えなかった。でも確かにみんな笑顔で帰っていく。老人の描いた絵や楽しそうな会話、そしてそこから創られる雰囲気に出分の居場所がないみたいで、少し怖かった。

「さてと」

陽も傾きその日最後のモデルにお別れをいって老人は立ちあがった。

「どうじゃった？何かいい発見はあったかい？」

「うん、そうだね・・・」

いい発見はあった、けれどそれをうまく言葉には表せない。

「そうか、それは良かった、役に立てて光栄じゃ」

折りたたみの小さな木製の椅子を片付けると老人は背中を向けた

「待つてください！」

とつさに声が張った。

「よかつたら俺に絵を教えてくださいませんか？」

明日もここにくれば会えるのはわかっていた。それでも今言わなければダメだと、いやむしろその一言が今日学んだ事のすべてを物語ったんだと思う。しばらく黙って立ちつくす老人、わかつている、どうやって断るかを模索中なんだ。俺みたいなストリートチルドレンを下に置く理由があるなら、逆に聞いてみたい。

「わしの名前はスミス、明日からはスミス先生と呼ぶように」老人、いや、スミス先生は満面の笑みで顔を振り返る。ウソだろ、ありえない、でもありえたんだ。スミス先生の気が変わらないうちに返事をしないと。

「俺の名前はジャンです、よろしくスミス先生」

その日の自分も仕事の最中は不思議な高揚感に包まれ、何か、な
んでもいいからとにかく叫びたい気持ちの中にいた。明日という
日が待ち遠しい、月の光や街灯をさけながら歩いていても目の前が
明るくも見えた。(でもひとつ嘘ついちゃったんだよねー)俺の
名前はジャンじゃない、というか教えてもらった覚えがない、ママ
が呼ぶ時はいつも“おい”くらいだったし、だからといって【ゴキ
ブリ】ですなんて名乗れないだろ。そう思うと人から名前を聞か
れたのは初めてになるのかー。ま、でも名前なんてなんでもいい
か、俺の名前はジャン、【ゴキブリ】・ジャンだ！ 月に向かって
自己紹介している自分が恥ずかしいよりもなぜか少し誇らしく感じ
た。

「おはようございます、スミス先生」いつもより早く起き、という
より勝手に目が覚めたというべきか、いつもの場所で先生がくるの
を、今か今かと待っているところだった。先生は椅子を広げると、
昨日と同じ配置に座りペンと紙を渡して、くれなかった。

「おはようジャン、いい天気じゃな」そういつて先生は空を見上げ
た「あの、先生今日はよろしくお願ひします、それで、あの、俺の
紙とペンとかは・・・？」差し出した手には見慣れた自分の掌だけ
見えた。

「ジャン、今から言うことがこれからの授業で一番大切な事じゃ、
よく覚えておけ」

行き場のなくなつた手を下に降ろしまつすぐ見つめてくる先生の
次の言葉を待つ。

「先生と生徒の契りを結んだら、その先生の言うことは何があつ
ても守るんじゃ。先生の言うことが、正しいとか、間違つてると
か考えてもダメじゃ。ただわしを信じる」

正直納得できる話ではない、だけどここでこのつながりを切つて
しまつたらきつとダメなんだ。

「はい、先生を信じます。たとえ何があつても」

俺は目でその決心を先生に突き刺した。

「よし、じゃあまず最初のレッスンは、見る事じゃ」

「見る事？」

「その通り、前にも言ったが人間には二種類の人間がいる、だが絵描きを目指すなら、キレイな所を見つける人間にならないければならん。だからしばらくはモデルをよく見ておけ、わかったな？」

約束通り素直に、はい、とだけうなづく。

先生の教え通りひたすらモデルを見続けた。あの常連の小鳥も、スーツのお姉さんも、家族が散歩している犬に至るまで。一度先生に注意されたのは、

「お前のそれは睨んでるように見える、それじゃーお客さんはいい笑顔になってくれんぞ」

それから満面の笑みでモデルと顔を合わせるようにしたが、それはやりすぎだ、とまたもや注意された。まさか見る事より見ている時の顔から学ばなければいけないとは。

「注意されるということは素晴らしい事、人よりひとつでも多く注意されるのはむしろ誇るべきことなんじゃ。最初からできている人間はその重要さに気付かない、だからある程度のレベルになると必ず息詰まる。まさかそんな初歩的な事で、人が転ぶ時はいつも足元に何かあるもんじゃ」

何日か経ち、色々注意を受けて少しひねくれているのが先生にはまるわかりだったようだ。

初日から給料はもらっていた。一日に来る人なんてもちろんバラバラだし、お金はその人の気持ちの額らしいので、自分には先生がいくらもらっているかは知らない、けれど決まって10ドルは渡してくれた。これで食べ物を買いなさいという意味なのだろうけど、それについてだけは、守らなかつた。お金を貯めておきたいというのもあつたけど、なによりこの街では、まだ食べられる物が放置されたまま捨てられていくのに、なんだか無性に腹が立った。

ある日、まだ最初のレッスンを継続中の俺は、食糧の探索中にも

ちゃんと周りを見る事を練習していた。そんな時、路地裏に子猫を見つけゆつくりと後ろをついて歩いてみると、つい街灯のついた道へとでていつている事に気付いた。あ、しまったと周りを見渡したが、よかった誰もいない。元の道へ戻ろうと振り返った時、ビルのガラスに誰かが映った。ビックリして声にだしそうになったが、よく見ると街灯で反射して映った自分だった。

「驚かせやがって、ビックリしたじゃないか」

ガラスの中の自分に怒ってみると、ふと思いついた。 (そういえば俺、自分の顔見たの久しぶりだな) あの街ではそんなの気にする事なかったし、なにより見た目がよくない方が、同情をひけてよかったし。 そうだ！俺はあることを思い出すと急いで帰る。

(自分の顔、最近見たじゃないか) なぜかあの日、捨てずに持っていた自分の似顔絵、あれを見れば何かわかるんじゃないか、路地裏を駆け抜け、公園に戻り自分の絵を手に取ると、もう一度さっきの場所へと戻った。俺のキレイな瞬間、そんなの考えたこともなかった。

街灯の下、周りに誰もいないのを確認しながら、ガラスに映る自分と「キレイな自分」が描かれているはずの絵を何度も交互に見比べる。

(わからない・・・何度見ても、そもそも俺にキレイな部分なんであるのか?) それでも先生はこれに何かを表現しているはず、だからこそ自分は本能的にこの絵を、メシの種にも金にもならないこの一枚の絵を捨てずに取っておいたんだろう。結局その日は最後まで答えが見つけれなかった。けれどこれが一番簡単な問題のはずなんだ、何だって自分の顔のことなんだから。その日からそうやって自分の顔をひたすら見るのが日課になった。

「ジャン君はいつも真面目ね、あまりにも見られるから意識しちゃってお化粧のスキルがあがっちゃったわ」

「俺もお姉さんの顔を見てるとドキドキします」

「あら、じゃあ私たち両想いね」

公園の木々が赤や黄色に変わり始める頃、いつものスーツのお姉さんともすつかり仲がよくなっていた。そしていつものように先生の絵をもらって笑顔になる彼女を見てみると、不思議と自分も気分がよくなった。

「最初のレッスンはどうじゃ、何かわかってきたかい？」

お客さんがいない間をぬって、目を見て聞いてくる先生に、ううん、と首を横に振り答え下を向く。

「正直わからないです。ただあのお姉さんや、よく話すお客さんを見て、最初に会った時よりキレイに見えるっていうのはあるんですけど、でもそれは、何ていったらいいのかわかんないですけど、違うんですよね。好印象になったからキレイに見えるじゃ、先生はどんな嫌な客でも、必ずキレイな部分を描いている。そこがわからないんじゃないか……」

（何より、自分の絵のそれすらいまだにわからないだし）呆れたのか、先生は前を見て黙っている。（しまったなー、嘘でもわかるって言っとけばよかったのかなー、でもそれで次にいっても嬉しくないしな。しょうがない、破門になったらまた別の生き方を考えよう）

「よし、次のレッスンへいこう」

驚いて顔をあげると先生はペンと紙の束を手渡してくれた。

「騙したようで悪かったが、実はその問題はそんな数カ月、数年ではわからん、一生かけて見つけ出すものじゃ。だからわしもまだまだわかつたらん。でもそれが最初のレッスンなのは訳がある。それは、一番長い時間をかけて学ばなければいけないものだからじゃ。だがそれは一生をかけるに十分値する、とても素晴らしいものじゃよ。そんな難問をお前はよく見て、よく考え、それを正直に答えた、だから次のレッスンじゃ」

戸惑っている暇もなく、さっそくといった感じで、絵の描き方について基本的なことを淡々と説明してくれた。輪郭、遠近法、ピント、背景、濃淡等、たった一枚の絵にも様々な技術が含まれてい

るみたいで、言ってることも意味もある程度理解はできた。 けれどもどいざペンを走らせると、まったく子供の落書きだ。

「最初はそれでいい、その基本の描き方を精進しつづければ必ず最後には形になる、間違っても、この描き方の方がいいんじゃないか？なんて自己流には走らないこと」

「はい！」

教えてもらった事を頭にいれながら、先生の横でお客様の絵を自分も描く。 先生が一枚の絵を描き終わっても、まだ輪郭の位置決めすら終わってない事が続く。 確かに、先生の言うとおり、こうやったらもつと早く描けるんじゃないかっていう言葉が頭の中をひたすら駆け巡る。 早く描けない苛立ちから少しでも雑になると、すぐに先生から叱咤がとんできた。

お金もそこそこ貯まってきた頃、シャツやパンツ等の替えも充実してきた。 普段から客商売をするにはまず身だしなみだと先生に言われているので、公園の水から街のコインシャワーへと移り、お湯の温かさに感動した。 服もゴミから漁ったものじゃなく、新しいもの買い替えた。 お守りはコンビニで見つけたジツパー付きの透明な袋にいれ、大事にズボンのポケットにしまっている。 なんとなくポロポロになっていても、それを見るとあの日の光景がよみがえり、自分の気持ちを奮い立たせてくれた。

やはり人は見た目なんだろう、最初俺の事をあからさまに避けていた服屋の店員も、いまではおススメを紹介してくれるし、その逆に警官は声をかけてこなくなったし、でもそれも完全な夜中になっ てしまえば話は別なので、相変わらずそこそこメシを漁ったり、ガラスに映った自分との格闘を続けている、今はそこに、アホみたい にニヤニヤしている自分の顔を描くという日課も加わった。

お客がこない時には先生は文字や算数といった、日常生活で最低限これは必要だというのまで教えてくれた。 文字を覚えると世界が一気に広がった、街にあふれる文字が少しずつ読めていくことが

こんなにも嬉しいなんて。 そのおかげで買い物もスムーズにできるし、算数のおかげで値札も読め、相手の言い値だけを素直に払っていたあの街の頃とは比べものにならないほど、生活も充実していた。

廃棄が始まる夜中になるまでは、街の中をブラブラ歩いては、世の中にはいろんな店があるんだなーと感心している。 身なりに自信がついて自分にも似つかわしくない店に入っていく事もたまにあるが、キレイなネオンに誘われて入ってみたら女性用下着店だった時には、店内を一周グルッと回って、用があつてきたんですよみたいな顔をして外にでると、顔から火がでそうなくらい恥ずかしくてそこからダッシュで離れた事もあった。

最近のお気に入りには「エレクトリカル」という名の凄く大きな電化製品屋だ、あそこにいると本当に驚きの連続で、いつかはここにあるものすべてに囲まれた家に住みたい、と夢見るほどそのすべてが魅力的だった。 なかでもテレビが最高の楽しみで、いつもアニメが流れているテレビの前で閉店までいる自分はきつと店員に覚えられているんだろう。 最初は先生の絵と違って雑に描かれたアニメの人間や動物達に嫌悪感もあつたが、見ているうちになぜか実際の人間よりキレイだったり、かつこよく見えたりして不思議とはまっていた。 特にヒーローの男が必殺技を使って、かつこよく悪役を倒しているシーンは日課の合間、一人で真似しては楽しんだ。

（あんなかつこいいヒーローの絵も描いてみたいけど、まだ早いつて先生に怒られるかな） レッスンが全部終わってからだな、必殺技を出し切るとガラスに向かって決めポーズをした。

（そういえば、先生はどこでどんなふうに生活しているんだろう？） 今まで日が暮れば帰っていく先生の姿を見ては、自分の生活に戻っていくだけの繰り返しだったが、ふと思いついたかのように、頭に沸いて出てきた。 家はあるのか、家族はあるのか、それとも同業者と最初に言っていたくらいなので、どこかに自分のテリトリ

ーを持つているのか？ いやそんなふうには見えない。 それを知ったからどうにかなる訳じゃないけれど、気にはなる、ちよつと明日聞いてみようかな？（別に怒られるほどのことじゃないし）

「わしの事などそんなに気になるか？」

はいもちろんですという感じに強くうなずく。

「そうじゃなー、まー前に言った同類というのは最初から否定していたくらいじゃからな、正直にいえば同類といえば嘘かもしれない。けれど所詮こんな公園で絵を描いて生計を立ててる老いぼれじゃ、後は察しておくれ」

結局何もわからなかったが、それ以上聞いても答えてくれなさそうなので、それ以上は追及しなかった。確かに先生は俺の事は何も聞いてこなかったな、お互い今の関係が続けるのにはそれが一番なのかもしれない。

でもやっぱり気になる。だからといって後をついて行って見つかってしまったら、今のすべてが壊れてしまいそうで怖いし。（でも気になる）夕暮れになるにつれその疑問も膨らんでいった。

「それでは、また明日」

「はい、先生」

いつものように日が暮れ別れると、街へと向かっていた。結局つけて行くのはやめておいた。懸命な判断だったと思うが、やっぱりちよつとは残念な思いもあったが、気持ちを切り替え、いつもの街の徘徊をしていると後ろから珍しく声をかけられた。

「あら、ジャン君こんなところで何しているの？」

振り向くとやっぱり、いつものスーツのお姉さんだ。

「こんばんは、ちよつと買い物に来ました」

一人で来るなんて偉いわねと褒められ、普通の同い年の子なら子供扱いするなと思うかもしれないが、俺にとってそれはものすごくうれしかった。

そうだ、このお姉さんなら何か知ってるかも、でもそれを聞くには最初に作った家族っていう設定を壊さなきゃいけないし、下手す

れば、俺だけならまだしも先生にまで迷惑がかかる可能性はあるし、例えば警察とか……。いやこの人ならわかつてくれるはず、人のキレイな所をみつつけるコツはまずその人を信じる事じゃ、って先生も言っていたし、

「あのちよつと今いいですか？」

思い切つて聞いてみる事にした、それはつまり自分の過去を話す事も加えて。

「そうなの、大変だったわね」

何て言つたらいいのかわからないっていう顔で見つめられる。

予想通りではあつたが、ちよつと心が痛んだ。よく考えてみたら誰かに自分の過去を話すのは初めてだ、といつてもそこそこ省いて大雑把に、まさかゴミを漁つてるとか、チーマーに襲われたとか、しかもゴキブリまで食つたなんてとても言えやしない。都合上ママには死んでもらつておいた。

「でもいい所にたどり着いたわね、ここは本当にいい所よ。あの先生に出会つたことも含めて。警察に言つて欲しくないなら言わないわ。私もあの先生がいなくなるのはさびしいから。」

「それでなんですけど、スミス先生の事について知りたいんです。何か知っていることありませんか？」

「それはスミス先生には聞いてみたの？」

「はい、聞いてはみたんですが、何だかうまくごまかされました、というより特には教えてくれませんでした」

お姉さんはしばらく黙つて、ここじゃなんだからと言つて、近くのカフェへと促された。

一番奥の席につき、お姉さんがアイスコーヒーを二つ頼む。一度こことは違う場所で飲んだ事はあるが、こんな苦いもの大人達はよく飲めるな、とシロップとミルクを大量にいれては飲み干した思ひ出がある。けれどお姉さんの手前、男の本能か？何もいれずにそのままちびちび飲んで、顔にでそうなのを我慢した。

「それで先生の事だけど、私は知っているわ」

「ほんとですか?!」

とつさに前のめりになつてお姉さんに詰め寄るが、ハツと我に返りまた椅子に腰を下ろした。

「でもね、私はあなたに教えられないわ、残念だけど」

「えっ」(もしかしてそんな壮絶な過去があるのか)俺の驚いた顔にあせつたのか、あわてたように手を横に振った。

「違うのよ、あの人はとても立派な人よ。今すぐにもその素晴らしさをあなたに語ってあげたいくらい」

「じゃあどうして?」

「先生はあなたに言わなかつたんでしょ、じゃあ私からは言えないわ。だってそうでしょ、あなたの過去も今日教えてもらつたけど、正直とても興味深かつたわ、今すぐ誰かに話したいくらい。」

でもあなたはそれを先生に言つてない、先生もあなたに過去を言つていない。それを私が言いふらしたりする事なんてできないわ。」

(確かに、俺の事、あまり先生に言つて欲しくないな)

「でもね、さっきも言つたけどあの人はとても素晴らしい人よ、絵だけじゃなく人生についても、きつと最高の先生になるわ。だから過去の事は気にせず、一日一日頑張つてついでに行きなさい」

「うん、ありがとう。なんだかスッキリした気がします」

先生は俺の事を何も聞かずに教えてくれる、それでいいじゃないか。なんだか安心して椅子に深くもたれては、褐色のアイスコーヒに映る自分の顔にほほ笑みが見えた。

「じゃあ次は私から聞いてもいい?」

「あつ、はい」

(俺の事?何だろ?)

「あなたはこれからどうするの?絵描きとして生きていくの?」
絵描きとして生きていくのは辛いのはわかつている、先生にもそれは何度も忠告されてるし、でもそれでも俺はこれに賭けるしかないんだ、何よりお姉さんがさっき先生について行きなさいっていったんじゃないか。

「はあ、そのつもりです」

ちよつと態度にだして返事をしてしまったのを少し後悔するが、いきなり笑顔になるのもおかしいし。

「そう、別に止めるわけじゃないのよ、本気ならこれに出席してみたらどうかと思うって、取っておいたの」

そういつて、お姉さんのバッグから紙を一枚取り出してテーブルの上に置いた。

「U-15 絵画コンテストといってね、15歳以下の子供たちから作品を応募してもらって、誰の絵が一番よかったかかっていうのを決めるの。つまりは将来の画家を探し出すコンテストよ。実際これで優勝すれば賞金ももらえるし、何より、しばらくはみんながあなたの絵を買いにくるわ」

そんな凄いものがあるんだ、でも

「俺まだ人に見せれるような絵は描けないんですよ、多分先生もまだ早いって許可はしてくれないと思うんで」

「大丈夫よ、何も今すぐ出せって言ってるんじゃないわ、ジャン君は確かまだ12歳よね、なら後3年もチャンスはあるわ」

それは俺が勝手に作った歳なんです、とは目の前の笑顔を壊してしまうかもしれないと思うととてもいえなかった。

「ありがとうございます。考えてみます、先生にも聞いてみます」と

「そうね、でも私はジャン君なら絶対いけると思うわ」

はいつと渡された紙を折りたたんだではズボンのポケットに入れ、次にお姉さんの名刺を渡された。

「多分応募の際に連絡先を聞かれると思うから、そこに書いてある住所と電話番号を書いておきなさい、私の所に連絡がきたらすぐに伝えに行くから」

目の前のアイスコーヒーを一気に飲み干すと、さすがに苦さが顔にでてしまったが、お姉さんは終始笑顔でお勘定は私が払うねと言つて先に出て行ってしまった。(コンクール優勝・・・なんちゃ

つて)透明になったグラスに映る自分の顔はまたにやけていて、グラスを下げに来た店員の女と目が合うと恥ずかしくなってしまうのでた。 　いつの間にか外はもう暗くなっていた。

(明日先生に言ったらなんて言われるだろう?)夜、いつものようにガラスに映った自分の似顔絵を描いては、これじゃ無理だなどと苦笑いをする。 　最近は描けば描くほど遠ざかっていつている気がする。 　絵の中にある無表情な俺の顔に先生は一体何が見えたんだろう?

「その人のキレイな部分か・・・」

翌朝先生にコンテストの紙を見せ、昨日お姉さんに会って教えてもらった事を伝えた。 　もちろんそれに至る経緯については伏せて

「いいんじゃないか」

予想とは反して好印象の返事が返ってきた。

「でも先生、俺の絵なんてまだ全然」

「そんな事はわしが一番わかっとなるわい、ただ目標はあったほうがいい、まだ、とか、全然、とかいつていたんではいつまで経っても次の目標へは到達できやしない。 　いい機会じゃ応募してみなさい、きつと大きな発見がある」

先生がOK出すなら何も問題じゃない、よしやってみよう! ・・・

・ところで、いつ、何を描けばいいんだ?

「うん?これは」

「どうしました、先生?」

いぶかしげな目でコンテストの紙を見ている

「このコンテストはとづくに終わっておるな、じゃが来年もやるみたいじゃから、その時に応募じゃな。 　一年間か、それだけあればお前の絵も見れる物になっているじゃろ、ハッハッハッ」

高笑いする先生に少し拍子抜けするも、正直一年間の猶予には少しホッとした。 　期限切れのコンテストの紙を渡してくる時点で、お姉さんはここまで予想していたのかもしれない、と思うとなんだ

か自分も笑いたくなくなってくる。一年間というのが絵を描くの長いか短いかはわからないが、その目標によって自分の中の何かが燃えているのは確かに感じ取れた。

「では今日のレッスンはそれじゃな」

と言うと椅子や道具を片付け始め、付いてきなさいと手招きして歩いて行くので慌ててついて行く。ペンと紙を持って街の中を先生の後ろについて歩いている、そういえば昼間に街の中を歩くのはこの街にきた時以来だなーって、よく歩きなれたこの街もちよっと違う顔に見えた。先生は立ち止まると、ここじゃと指を指す、真っ白なキレイな建物が街の真ん中に建っていた。何回か見た覚えはあるけどいつも気にしてなかったような、一体ここは？建物を見上げていると入口の前にいた黒服の男が近づいてきた。

「これは、ミスターミス。ようこそおいでなさいました」

そういうと男は先生と握手し入口につながる階段を上がっていく。どうやら先生は本当にすごい人なのかも、黒服の男の態度からそう見えた。

「今日はどういったご用件で？」

「この子にこの前のコンテストの絵を見せてあげたくてな」
チラッと黒服の男が俺を見てはすぐに先生に顔を戻す。

「このお子様は？ 確かお孫さんはいらっしやらなかったはず」
思わぬ所から先生の情報が聞けたが、なぜかちつとも嬉しくなかった。

「この子はわしの一番弟子じゃ、かまわんじやろ」

ええもちろんっと今度はおれの事はチラツとも見ず、先生のみを招待するかのようその場所へ案内された。

彫刻や写真、何か訳がわからない形の物、そして絵画、廊下を歩いていると各部屋ごとに分かれていて、見た目通りかなり広い建物だ、なるほどこれが美術館というやつか。通された部屋は途中見たのに比べ小さく、10枚ほどの絵が飾ってあるだけだった。数組の親子連れがいるけれど、多分このコンテストに応募し、入賞し

たのがどんなのか見に来たんじゃないかな、と勝手な思い込みをするほどみんなは楽しそうに絵を眺めていた。

「ここにあるのが過去のコンテストの入賞作品です。コンテスト終了後ひと月はこうやって歴代のを飾っておきます。今年のは、その一番左に飾ってある高台から見たこの街を映した絵です」

四角い部屋をぐるっと一周して、自分より少し背の高い所に掛けられた歴代の入賞作品をじっくり見ていく。見れば見るほど自分がさっきまで燃やしていたやる気が失せていく。(俺にこれを超える絵が描けるのか?) 今年の入賞作の街の絵は、まさしく先生の言うキレイな部分を切り出したものなんだろう。あの公園はこの絵の中では小さな一部にしか過ぎない、けれどその木々の色は実際より少し鮮やかな緑をしていて、空の淡い青色と混ざり、澄んだ空気の匂いを届けてくれるような気がした。

「どうじゃ?」

「凄いです・・・」

いつの間にか後ろに立っていた先生に声を掛けられても、その一言しか答えられなかった。

外にでてもしかばらく放心状態だった。そりゃそうだあんなに大きな差をみせつけられたんでは、行きと違い歩く足も重く感じる。

「あれが美術館というものじゃ、世界の価値ある物が集まる所、凄いいじゃろ?」

先生の明るい声にもとりあえずうなずく事しかできない。

「だがな、価値ある物イコール優れた芸術ではないのじゃ」

言っている意味がわからず次の言葉を待つように先生の顔を見上げると、先生はにっこりほほ笑んで。

「例えばな、わしがいくら気持ちを入れてあのお姉さんの似顔絵を描きました、と言っても他人には門前払いされるだけ、けれどごその有名人が書いた落書きみたいなのサインなら、数万ドルだしても欲しがる人間はたくさんいるのじゃ。その集まりが美術館といても過言ではないんじゃないよ」

「別にすべてを否定している訳じゃないぞ、素晴らしいものもたくさんある、さっきの街の絵もそうじゃ。だがそれくらい芸術の評価というのは難しい。正直わしも、世界一有名な画家の、ピカソの絵ってというのがどうしても理解できなくてな、実は自分には絵を見る目というのがないのかもしれないのお」

「つまり、お前をあそこに連れて行ったのは、何もあの真似をしるといっとるんじゃない、世の中にはいろんな絵がある、その中であそこに掛けてあったものがコンテストを取れる絵であり、売れる絵というものじゃ。この先どうしていくかの材料になればいいと思ってる」

その日は公園に戻ることなく、街の途中でそのまま解散となった。先生の言いたい事はわかった。自分でもこのまま似顔絵だけで一生食っていくのは無理なんじゃないのかという葛藤もしていたくらいだ。あの時お姉さんが言ったことや、さっきの黒服の男からわかるのは、やっぱり先生は俺とは違う。何か他の事で財を成して引退後の余興みたいな感覚で似顔絵描きをやっているのじゃないか。そう思っては先生へのむかつきも頭をよぎり、先生は絵で失敗しても生きていけるから、等と無駄な言い訳を口に出してしまいたい。そうなのをこらえている。今までも何度もこんな風に、特にこの街に着いてからは、せめて普通の家に生まれていれば、せめてあの街を楽しそうに闊歩する集団のように学校にでも行っていれば、せめて・・・、無駄とはわかりつつも頭の中を前触れもなくよぎるそれらを、無理やり納得させている自分へさらに腹を立たせていた。

その度にアニメの必殺技を真似しては近くにある木を殴りながら自分に言い聞かせる。（俺にはこの道しかないんだ、今はこれを信じて行くしかないんだ）と。その日、葛藤は夜明けまで続いた。翌朝目を覚まし、太陽の位置を見て遅刻だと気付いた。慌てて池の向かいのいつもの場所へ向かうと、先生とお姉さんがそこにいた。

「遅いじゃないか、ジャン」

「すみません、寝坊してしまいました」

「あら、ジャン君にしては珍しいわね」

いつものようにロングヘアがまぶしくスーツの決まったお姉さんに、朝から笑われて倍恥ずかしくなった。さっさと自分の位置をつくってその場に座りペンと紙を持つ。

「スミス先生に聞いたわ、まさかコンクールが期限切れだったなんてごめんね」

申し訳なさそうな顔で見られるけど、むしろ一年の猶予がもらえた事に感謝したいくらいだ。

「それでコンテストの絵を見てみてどう？」

「凄いですね、とても今の段階じゃ太刀打ちできません。でも来年までにはあれ以上のものを描いてみせます」

口先だけは立派じゃな、という先生と、かっこいいと拍手してくれるお姉さん。ほめてもらいたいんじゃないかと、ここで謙虚な言葉でごまかしてしまうのは逆に応援してくれる先生やお姉さんに失礼な気がしたし、たとえハツタリでもその自分で発した言葉がこれからの一年を支えてくれる気がしたんだ。

「それでジャン君は何を描くの？」

「似顔絵を、俺にはこれしかないんで、だから……先生の似顔絵を描きます！」

「何もこんな老いぼれの顔を描かんでも、もっといいモデルがあるじゃろ」

それは名案ねと茶化すお姉さんに少し照れている先生に詰め寄ると、半ば無理やり許可をもらう。元々許可をもらわなくても、描くつもりだった。今の俺には先生のキレイな部分が見えているはずなのだから。

一年という月日はあっという間だった。あれからも先生のレッスンを一つずつこなしていき、絵のレベルは確実に上がっていつているのは見てとれた。けれどやはり人のキレイな部分を見出す事

はまだまだクリアできそうにもない。その中で先生をモデルに選んだのは、いつも一緒にいるから似顔絵描けるしキレイな部分の一つや二つ知っているからってことではない。それじゃ意味ない事は前にも学んでいる。じゃーどうしてか、先生と初めて会った時あの時の「この街へようこそ」と言ったあの顔がずっと忘れられなかった。

あの葛藤の夜も、その顔がどうしても離れなかった。その時確信したんだ、これがきつとそのキレイな部分だっというのを。だからそれをずっと描き続けた、先生と向き合って描いた事はない、ただ自分の中にだけあるそのワンシーンを切り出し、ひたすら描いた。陽が暮れてから始まるそのレッスンは、月の光も、12時には消える公園の灯りも、必要なかった。ただ紙の上に創ったそのシーンに沿ってペンを走らせる。雨の日や雪の日には一日休みをもらい、傘を木にひっかけスペースを作り描き上げた絵は、今日に至るまで何百枚と重なっていった。納得のできる絵が完成したのは応募締切三日前の夜、出来た瞬間思わずペンを宙へと放りあげ、そのまま後ろへと倒れこんだ。遠くに光る星の瞬きが疲れた目を癒してくれ、いつのまにかそれを胸に抱いたまま眠りについていた。朝起きると、また寝坊した事に気づく。

「あーもう！」

自分に怒りをぶつけ、放り投げたペンの行方を探すのにてこずりながらも、何とか用意を済ませ急いでいつもの場所へ向かった。

しかしいざ着いてみるとそこに先生の姿はなく、遅刻は気のせいだったかな、と公園の時計を見上げれば、間違いなく遅刻だというのはわかった。（珍しいな、先生も遅刻かな）先生が遅刻したことなんて今までなかったし、天気は晴れ、休みのはずはない。とりあえず怒られずにすんだとその場に座り先生を待つ。先生がいなければお客が付く事はない、（付いた所でまだそれでお金をもらえぬ段階じゃないので断らなきゃいけないけど）

それでも先生目当ての常連客の小鳥が木にとまったので、今日は

特別だぞ、と紙をとり描き始めた。よく顔をだすこの小鳥も、先生が描いている時には、まだその前の客の絵を完成させる事で手がいっぱいなのは、実は初めての挑戦だった。人間と違ってちよこちよこ動く鳥を描くのは確かに難しく、シーンを切り取るというても、鳥の造りがまだ理解できていないので、つい何度も見てしまふ。そうやってしている内には飛び立っていつてしまったが、いつもより長く居座っていてくれた気がしたのは、やはり俺に対するあの小鳥の気づかひだったのだろうか。その恩にも応えるべく何とか記憶を呼び戻し描き始めるが、完成した絵の小鳥はどうも何かパーツが足りていない感じがぬぐえなかった。

(ウーン、まだまだ自立は無理だな) ペンを置き空を見上げると、今日も青い空に白い雲がゆっくりと流れ、さっきの小鳥の仲間だろうか、チュンチュンと公園に響き渡り平和な時間が流れている。

「こんにちは」
いつも前を通る犬の散歩のおばさんともすっかり顔なじみになり、挨拶を交わす。先生がいない事を聞かれることもなかったのは、まートイレにでも行っていると思っただろう、むしろそれが普通の解釈だし。

先生にもらったスケッチブックもパラパラと見直す。この紙の束をスケッチブックと呼ぶことを覚えたのは、先生の絵のレッスンの合間にしてくれた文字の勉強のおかげだ。それもあってスケッチブックはもう3冊目になる。絵と文字、算数が混じったスケッチブックを見ていると、もっと整理して書けばよかつたなと反省しつつも、その一枚一枚の中に自分の歴史があるようで誇らしく思えた。

それにしても遅いなーと思っていると昼休みになったようで、お姉さんがやってきた。

「こんにちはジャン君、先生は？」

「こんにちは、それが今日はまだなんです。おかげさまで遅刻がばれなかつたですけど」

「こら、また遅刻したの、代わりに怒るわよ。でも先生いないの、残念ね」

当たり前だがちよつと残念そうな顔をするお姉さんに、少し先生が憎らしく思えた。

「ところで絵は完成したの？」

「はい、それで今日美術館へ持って行こうと思ってるんですけど、先生が来るまでは待つていようかと、今度は俺がいない事を先生が心配するかもしれないので」

「それもそうね、代わつてあげたいけど私も仕事に戻らなくちゃいけないから、ごめんね」

また明日くる事を先生に伝えてほしいとの伝言を預かり、手を振りながらお姉さんは帰つて行った。（まだ締切までは3日あるくらいいかな）結局その日先生は来なかった。

翌朝、今度は遅刻せずいつもの場所で先生を待つ。もしかして昨日先生に何かあつたのか？なんて少し不安になりながらも、待てばなんてことはない、いつもの時間に先生は現れた。

「いやー昨日はすまんかった。つい用事があることを伝えるのを忘れていての」

平謝りする先生に別に怒る気はない、むしろ少しよぎつた不安が解消されてよかつたくらいだ。先生の持つてきた椅子を広げ、いつもの形をつくと先生に聞いてみる。

「昨日の用事つて何だつたんですか？」

「なに大したことじゃないんじゃ、知り合いの結婚式でな、途中でジャンに一言伝えなければと思ひ出しはしたんじゃが、なにぶんパーティの真つ最中でなかなか抜け出させてくれなかつたもんでな、本当にすまなかつた」

「それなら別にいいんです」

本当に申し訳なさそうな顔をする先生に首を振る。

「どうやら心配させてしまったみたいじゃな、ところで昨日は何かあつたか？」

「あつ」

なんだかわざとらしそうな反応をってしまったが、危うく忘れるところだったのはシャレにならない。

「コンクールの絵が完成したんです。 ちょっとしばらく抜けてもいいですか？」

「おー行つてきなさい、そんなに急がんでもいいからな、今日は罰としてわしが待ちぼうけをくらう番じゃ、はっはっはっ」

いつもの高笑いに安心し、ペンとスケッチブックをその場に置く。と自分の寝場所に作つてある、貴重品置き場こと、ただ土を掘つて、その中にゴミ箱で拾つたカンカンに入れておいた作品を、取り出しそのまま公園を出る。先生は急ぐなとは言つていたが、早く戻りたいとかではなく、早くその作品を渡したいからである。急いでも評価に変わりはないのはわかつているが、それでも早く提出することになぜか喜びを感じれた。

美術館の前に立つ前もいた黒服の男に挨拶をするも返つてこない、俺のことなんて覚えていないんだろうな、いや例え覚えていても俺にはしたくなさそうな雰囲気をもしだしている男だった。嫌われるのは慣れていたけど、そんなことが気になるなんて、よく考えたらこの街に来て俺に挨拶してくれる人がいる事が、普通になつていた事の方にいまさらながら驚いた。（変わったのは俺の方なのかもしれないな）受付のおねえさんに作品を渡し、名前と電話番号を聞かれ、お姉さんの指示通り名刺の連絡先を書いておいた。帰る時も黒服の男に挨拶をしていく、返つてこなくてもいい、階段を下り振り返り美術館を見上げて思うのは、自分がこの街で人間として生きていく実感だった。

でも所詮は【ゴキブリ】、世の中はそんな温かくはしてくれないものだ。

「よい」

聞き覚えがあつたはずなのに、背中から聴こえた声に躊躇なく振り返る。まさしく平和ボケというものだ。

「久しぶりだな、まさかこんな所にいるとは」

思わず体が後退る。まさか、なんでここに、信じられない事態に頭が困惑するがそこにいたのは紛れもなく、あのリーダーだった。

「立派な身なりをしているじゃないか、最初は別人かと思ったが、やっぱりな、俺らと同じその臭いはどんな格好していても隠せねーよ」

リーダーの男を含め3人、みんな見覚えがある、あの街でこいつらの事を調べている時に何度か見かけた顔だ。

いわれるがままに裏路地へとついていく、地の利ではこちらが有利だ、逃げだそうと思えばいつでも逃げ出せる状況にいるのはわかっていた。　　だけど逃げなかった、いいや逃げれなかった。　　その理由は前とは違う、足が震えていたからじゃない。　　もしあの美術館の前で助けを呼んだり、いきなり逃げ出した俺を捕まえようとするやつらがいれば、この平和な街の住人達は警察へと走るだろう。

運よくその両方を回避しても、こいつらはまた多くの仲間を連れてこの街にやってくる。　　頭のいいこのリーダーがいるチームだ、きつと先生の所にたどり着く、それだけは何としても避けたかった。

「俺は意外と物覚えが良くてな、それに執念深い。　　もしあれがたまたまだったというなら、さすがにもう放っておいたかもしれない、けれどあれは違う。　　お前は俺らのテリトリーと知りつつ、更に俺らをコケにするためあの行動を起こした。　　まさか気付いてないと思っただか？あの時お前が俺らの事を観察していることなんてわかっていた。　　だが誤算だったのは、おまえには他にアテがないから、またやられるんじゃないかと俺らにビビりつつも、俺らがいなくなったらゴミでも漁ってるもんだとな」

三方を壁に囲まれた路地で、後ろの唯一の道の方に二人が腕をこまねいて立ち、前ではリーダーが積みあげられた箱に腰かけている。　　逃げるつもりはないが、かなりのプレッシャーが襲いかかってくる。

「まさかな、あの制裁の後にそんなことをする奴なんて今までい

なかった。遅かれ早かれ、いつかはみんな頭下げてチームに入ろうとするのが普通だ。そうしなければあの街では生きていけない、いや俺らみたいなモンはその生き方を学ばなければいけないんだ。

だからその報告をうけた時は思わず笑っちゃったよ。むしろそんな度胸のあるやつならぜひチームに入ってほしいもんだ。でもリーダーとしてそういうわけにはいかない」

言葉通り笑っていたかと思うと、リーダーは立ちあがりズボンからバタフライナイフを取り出し近づいてくる。本気の目に後退すると踵が当たる程、後ろにいた二人は迫っていた。

「前にちゃんと忠告したな、二度目はないって」

いつかはこの日が来る、わかっていた。覚悟もしていたが、なんでだろう、怖くてたまらない、刺されて死ぬ恐怖、そんなんじゃない。情けなのか遊んでいるのか、ゆっくりと近づいてくるその男の目から視線は外せなくなっている。怖いのはナイフ？怖いのはこの躊躇なく俺を殺そうとしてくるこの男？あの時計画を実行した時の自分に聞いてみる、なんでお前はあの時こうなるのも眼中に入れてあんな事したんだ？

あの時と今……。そうか、わかった！

ナイフが首に近づけられた瞬間、自ら前に出る、首に冷たい感触が当たり、暖かい物が首をつたう。予想外な獲物の動きに、リーダーはとまどい一瞬ナイフを引いた。気が狂ったから前に出たんじゃない、前に出る事で自分が自分の心を理解したことを自分に証明したんだ。それはナイフの恐怖に打ち勝つ程のものだと。

もしあのまま動かなかったらこの男は普通に刺しただろう、もし恐怖に負け後ろに体を反らせば、ナイフは勢いをつけ深く刺さっていた。図らずも前に出ることが正解だった。証拠にこのナイフを持った男は首にあてながらも、俺の次のアクションを待っている。なら今この状況の中でリードしているのは、3人の男に囲まれ、首にナイフを当てられている俺以外の何者でもない。だから伝えた、最期の言葉にしては少し情けなくなるかもしれないが。

「少し待ってくれませんか？ 逃げはしません、必ずまた殺されにきます」

ナイフの先が首にさつきより強く当たる。上から見下ろしてくる視線に、爪が食いこむ程拳を強く握り、強固な視線で返す、わずかでも離れたらその瞬間に刺されそうな気がした。

「期間は？」

「1週間、1週間あれば」

思いは通じたのか、数秒間誰も動かず、静かな時間が流れた。

「ふん、わかった」

そういつてリーダーはナイフをたたむとポケットにしまった。

「1週間後ここで待つ、来ても来なくてもおまえの最期だが、懸命な方を選べよ」

固まったままの自分の横を抜け、後ろの2人に俺を殺さなかった事を咎められながら去って行った。ポツンと一人その場に立ちつくす、心臓は遅れを取り戻すかの様に鳴り響き、体はそれに合わせ震えだす、体ですら生きていることが信じられないだろう。小刻みに吐いては吸う空気の味に生を実感させていた。

1週間後、コンテストの結果が出る。あの時死の恐怖に立ちあつてわかつたのは、俺の人生に目標が出来ていたことだ。あの頃の俺が死んでもよかつたと思っていたのは、その先に何も見えなかつたから。でも今は見えている、コンテストで優勝し、世界にも認められ、有名な画家になり、先生やお姉さんにほめてもらえる自分の姿を。みんなに話したらきつと笑われるだろう、でもわかつたんだ、こうやって将来の自分に希望を持つことを夢つていうんだなつて。

それにしてもちょっと遅くなつてしまった言い訳はどうしよう、首の傷は幸い浅く、血も拭き取れば消える程だつたからなんとかごまかせるとして、こればつかは正直に話して謝るなんてばかげた事はできない。まだ収まらない動悸をごまかすためにあれこれ考え、吐きそうになる呼吸の乱れを隠すために急ぎ足で街を抜けても、頭

をよぎるひとつの事が離れて行ってくれない。　だつて来週死ぬ
だぜ、俺。

公園に着くころには汗だくになっていた。　それは急いできたか
らということでもいいのだろうか、でもこれで少しはごまかすのに有
利にはなった、この汗も激しい呼吸も急いで帰ってきた、この事実
があれば少しくらいおかしい言い訳をだしてもそんなに先生も怒ら
ないでくれるはず。　今日という日はもう忘れよう、そうしたかつ
たんだ。

先生の所に急ぐも、そこに先生の姿はなく、お姉さんがしきりに
きよるきよるしながら立っていた。

（朝はいたんだし、今度こそトイレかな、それにしても今日も先
生のいない時に来るなんて、お姉さんもついてないな）俺の存在に
気づくとこつちに高く手を振って走ってくる。　どうしたんだ、と
思う間もなく不安が先に頭をよぎっていく、こんな嫌な勘なんて今
冴えなくていいから、さつきそれを發揮してほしかったのに、近づ
いてくるお姉さんの顔は先生に会えなかった残念のそれではなかつ
た。

「やっと見つけた」

ハアハア息遣い荒くも必死に何かを伝えようと呼吸を整えている
間、俺は何も聞けずただ次の言葉を待っているしかできなかった。

「どこ行つてたの？・・・そっかコンテストの絵ね。　いい、よ
く聞いてね。　スミス先生が倒れたの、今救急車で街の中央病院に
運び込まれているわ。　私も車で向かうからあなたを待っていたの、
さあ行くわよ」

お姉さんは腕をつかみ、一步も動こうとしない俺の体を強引に引
つ張る。　だが俺はお姉さんの手をふりほどき、走りだした。

車に乗った方が早いだろう、でも走って行きたかった、そうし
なければこの胸の痛みが治まらない気がしたから、そして何より、
俺の手をつかんだお姉さんの顔が怖かったから。

病院へと続く道は無我夢中で走りぬける、信号の間は足踏みして、

そうやって余計な事を冷静に考える時間をなくしたかった。車にも乗らず、お姉さんの顔が怖く感じられたのもきつと事情を話されるのが嫌なんだ。自分の目でそれを見たい、そうする事が今の俺にとつての唯一の救いのはずなんだから。

病院に駆け込むとそこではお姉さんが待っていてくれた。俺のした行動には何も言わず今度は優しく俺の手を握り、病室へと引張って行ってくれるその手はとても温かかった。

ここが病室よと部屋の前で停まると手を離し、その手で背中を押してくれる。呼吸を整えゆつくりとドアを開ける、そこには笑顔で座っている先生しか想像できなかった。広い部屋だった、ただそこは全てが真っ白でその中にあるひとつのベッドが何とも言えない虚無感を引き立たせていた。調子のいい想像と違い、ベッドに横たわる先生、口や腕にいろいろなチューブがつながっている、その姿を表す言葉はなかった、ただ先生が横になって寝ている、それだけだった。

「私に来ていつものように先生に似顔絵を頼んだの」
茫然としている俺の後ろにお姉さんは立っている。

「突然だったわ、いつものたわいもない話をしていたら、先生がペンを落としたんで拾ってあげたの。でも渡しても受け取ってくれないからどうしたんだろうつて覗き込んだら、目をつぶってだれていたの、慌てて救急車を呼んだわ、そしてあなたがくるのを待っていたの」

お姉さんの声がだんだんこもった声に変わっていくのを、俺はうなずいて聞いていることしかできなかった。

「さつき看護師さんから聞いたわ、先生、昨日から入院していたんだって、今日はそれを抜け出して行ってみたい。孫に会いに行くって言って。孫なんていないのはみんな知っていたから誰も気に留めなかったみたい、でも先生は実行したわ。ジャン君意味はわかるわよね、先生はそうまでしてあなたに会いに行ったのよ！」

お姉さんは俺の肩を掴み、振り向かせる。俺の視線に合わせし

やがんでいるお姉さんの顔は泣いていた。

「いい、ジャン君、これから起こっていく事に目を背けちゃダメ、しっかり見続けていきなさい、きつとそれがあなたの人生にとって最高の教えになるはずだから」

俺の肩の上で泣き崩れるお姉さんの重みと言葉にこれから起こる事はわかっていて。目を背けたかった、さつき殺されておけばよかったとすら思えてきた。でもこの肩の重みに誓って見続けるんだ、最後のレッスンを、そしてそのレッスンが終わったなら・・・さよならだ。

その日の夜、いつも日課にしていた事をさぼった。自分で決めた日課をさぼるなんて人生で初めてかもしれない、そう思うと俺は意外とマメな奴だったんだな。自分の場所で、温かいホットドックをかじり物思いにふける、いや、むしろ何も考えてなかった。ただ夜空を見上げひたすら食べ続ける、そこに詩人の様な感慨はない、ただ無心だった。

(1日の内にいろいろ起こったな、それこそあのお姉さんの様に泣き崩れられたなら少しは楽になるかも) けれど結局その夜は何一つ考えれる事はなく、ただ木にもたれながら星の降る夜空を見上げていただけだった。

木漏れ日がまぶたに射し朝を告げる、どうやらあのまま眠っていたらしい。立ちあがり軽く伸びをすると公園を一周することにした。別に深い意味はない、ただあそこに座り続けていたら、昨夜の様に何も考えず何もせず1週間を過ごす事もできただろう。でもそんな自分が嫌だったのかもしれない、ただ歩く、それが今自分にできる事のすべてだった。

公園をまわればそこはいつもと同じ時間が流れていた。風の音、小鳥の声、人々の笑顔。でもその風景の中に足りないものを感じている人はいるのだろうか、きつと俺以外ないかもしれない。もしあのランニングのお姉さんが明日こなくても、挫折したのかも

と思うだけだし、あの犬の散歩のおばさんが来なくなっても、引越したのかもと頭をよぎっては1週間もすればいないのが当たり前になるのだらう。それが普通なんだ、だって俺は、俺こそそうやって生きてきたんだから。

人とつながるといふのがこんなに苦しいなんて、公園を回り、いつも先生がいた場所に立つと涙があふれてきた。そのまま泣き崩れる自分の姿に公園の空気が変わるのを感じれた。みんなが俺を見ている、小鳥でさえもさっきまでの鳴き声を止めてまで。止めたかった、でも止めれなかった。先生はまだ死んだわけじゃない、これじゃーみんなが勘違いするじゃないか、みんなにはさっきの俺みたいに思っていてほしい、いつもの似顔絵のおじいさんがここにいないのは、きつと挫折したんだらう、きつと引越したんだらう、そうやっていつもの時間を流してほしかった。

そうだよ、先生もきつと同じ気持ちのはずだ！誰よりも人のキレイな部分を見ていた先生ならきつと）歯を食いしばり必死に泣くのを止めると、走りだした、目指すものはペンとスケッチブック、それを持つとまた戻りいつもの位置に座りこむ。無理に作った笑顔に、きつと真つ赤なうるんだままの目、やるしかないんだ、これが先生への恩返しになると信じて。

先生がいつも持つてくるあの小さな木製の椅子はない、だから今日の所は自分の使っている毛布を、前の土の上に敷きそこに座ってもらおうにしよう。ただそれだけだけど準備は万端だ、後はひたすら待つしかない。いつもの絵のうまい老人と違うこんなガキに、金を渡してまで似顔絵を描いてほしいとう物好きが現れるのを。

お金は必ずもらう、それも先生の教えだ。あの時美術館で教えてもらった「売れる絵」、つまりお金を出しても欲しい絵というのを描けなければ、今の俺には意味がないんだ。後1週間の内に一枚は必ず売れる絵を描く、お客さんが自分の似顔絵を、お金を出してでも欲しいというものを。たった一枚と思われるかもしれないが、その一枚を描くことに俺の残りの人生を賭けられる。それは

人生を賭けるに値するものだと思うから。

これは予想通りだと言つてもいいのだろうか、目の前の毛布の上に一番に座り込んだのは、先生の常連さん、いつものスーツ姿のお姉さんだ。昨日の泣き顔はどこ吹く風、お姉さんはいつものように、いやいつもよりキレイな笑顔でそこにいた。こんにちは以外に交わす言葉はなかった、お客さんが前に座つたならやる事は一つ、絵を描くこと。本来なら会話も混ぜつつお客さんに楽しんでもらうのはわかっている、そんな先生の横でいつも見ていた。でも今の自分にできる精一杯は笑顔で居続けることしかできなかった。

静かだ、まるで公園の中にいる全ての音という音が、俺の絵の完成を待っているかのように何も聞こえない。現実ではそんな俺の事などおかまいなし、時間も音も騒がしいくらいに動いているのはわかっている。それでも今の俺には何も耳に入ってこない、紙の上に映る切り取つたお姉さんのワンシーンだけを見ることしか、脳が許可してくれないようだった。

何十分かかったのだろうか、描き終わると同時に周りの音が体に響いてきた。今の自分にとって出せるものは出した。動くことなくずっと笑顔で待っていてくれたお姉さんに自信満々に渡す。

お姉さんはその自信の絵を一瞬見ではその場に絵を置いて、またねと言つて立ち去つて行つた。

（あはは、よかった。お姉さんがお客さんで）返された絵を膝にのせ足を延ばして空を見上げると、不思議と気持ちは悲しいよりも爽快だった。

それからも何組か俺の前に座つてくれた。母親に連れてこられた3歳くらいの子供や、たまに来るいまどきの明るいお兄さんは、「今日は君が描くの？」

と少し馬鹿にした感じで毛布にドカツと座つたり、先生の絵を期待し、やってきては、せつかく来たんだしという感じで似顔絵を頼んでくれた。そしてそれでも皆がお金を渡してくれるのを、俺はかたくなに拒んだ。先生のレッスンのおかげで人の顔の変化は

随分勉強できた。みんな絵を受け取った時の顔が、期待していたもの、先生の絵を受け取った時とあからさまに違ったからだ。みんなきつと俺が子供だから同情してお金をくれるんだらう、お姉さんはそれをわかって俺にあやっただと思う。だからこそそのお姉さんの気持ちに応えるためにも、俺はお金を受け取らない、みんなが俺の絵を見てあの笑顔を見せてくれるまでは。

そんな決意もむなしく、次の日から人がパツタリ座らなくなった。昨日、日が暮れてから買いにいった木製の椅子も、さびしそうだ。もう噂が広まったのかな、たった1日で先生の造り上げたものを壊してしまったんじゃない、一体今まで何をしていたんだか。でも今はそうやって落ち込んでいる場合じゃない。先生の時間も、俺の時間も、俺の絵に対する信頼を創るのを待ってくれる程余っていない。常連の小鳥も俺に愛想をつかしたのか今日はやってこない。ただ空を見上げるとお姉さんがまた今日も前に座ってくれた、昨日と同じ笑顔で。

「ジャン君はもう先生のお見舞いには行かないの？」

お姉さんの優しい問いかけにペンを止めず黙ってうなづく。()
冷たい奴だと思われたかな？ でも俺だって本当は行きたいんだ、先生の傍にいたい。でも俺がいたって邪魔になるだけだし、先生の親族やお見舞客も俺みたいなストリートチルドレンが、先生の周りをウロチヨロしていたと知ったらきつと嫌な気分になるだろう。

何より、ただそこで先生の最後を見届けていましたなんて、あの世で先生に会ったら怒られるよ。俺は今正しい選択をしていると思っっている、後1週間の命なんてお姉さんは知らないだし、それについてお姉さんに相談するつもりはない。あのリーダーは俺の事を信用してくれたんだから、俺もそれに応えるんだ。

「そう、じゃあ何も聞かない、きつと何かあるのよね、私は知っているわ、ジャン君がとても優しい子だって事。ここで守っているのね先生の絵と先生の人生の一部を。あなたならきつとそれをやってくれることも。・・・がんばってね」

お姉さんの言葉はとても痛かった、自分の事をわかってくれるのも、そんな俺に笑顔でエールを送ってくれる事も。今日もお姉さんは絵を受け取らず帰って行った。お姉さんが行くのを見届けると、膝を抱えまた泣いてしまった。このまま何も言わなくていいのかな、あんなに俺の事を信頼してくれているお姉さんに。聴きなれた鳴き声、いつもより遅く常連の小鳥も来てくれたみたいだ。（何だお前も俺の事を見捨てたわけじゃなかったのかよ）じやあその思いに応えないとな、俺は再びペンを取り、小鳥のワンションを切り取った。（きつとお前のキレイな部分も描いてやるかな）紙の端に水滴が一粒湿っているのはきつと見逃してくれるはず。

1週間、時間は無常にも通り過ぎて行った。あつという間だったな、一ドルも受け取れずに過ぎて行く日々は、たまに来てくれた新しいお客がもう一度来てくれることはなかったくらいだ。最後の日、お姉さんと小鳥は一緒にやってきた。最後まで付き合ってくれた二人が終わったらそれを最後にしよう、コンテストにも行かないといけないし。

用意が出来たもののなかなか座ってくれないお姉さんを見上げると、目をつむってうつむいていた。

「ねえジャン君」

椅子に座らずその場でしゃがんでは俺と同じくらいに目線を合わせていた。

「ごめんね今日はお客じゃないの、・・・だって今日は笑顔になれないんだもん」

それだけ言うとしゃがんだまま膝を抱えうずくまるお姉さんにかける言葉はなかった。（そっか、だから今日はおまえもそんなに鳴いているんだな）木の枝に止まって歌でも歌っているかのように鳴く小鳥を見上げ、自分の情けなさが一層身にしみた。結局何もできなかつた、先生の最後を看取することも、先生に教えてもらった

ことを出し切ることも、泣き声を殺しながら膝を抱えるお姉さんを前に、俺は泣くことすらもできなかった。

せめて葬儀には行つてあげて、と先生の家の住所が書かれた紙を渡すのと一緒に、もういいよね、とお姉さんは涙を拭くと、俺の為に先生の経歴を教えてくれた。

先生が産まれたのは戦時中この街のどこかで、すぐに両親を亡くし俺と同じ様にストリートチルドレン時代があつたらしい、（だから俺と同じと言つたのか） そんな時代の闇に葬り去られるはずの先生を救つたものが、あの「エレクトリカル」という名の電化製品屋の当時の社長だつた。 その社長はとても人情が強く、毎日のように乞食をしている先生を見て、大人達が起こした戦争のせいでこんな事をしなきゃいけない子供がいるんだ、とたまたま目に着いた先生を自分の工場に雇つたらしい。 当時先生は俺と同じ年くらい、その時社長の目に留まつた先生はただ運がいい子供というだけだつた。

でもそこから違った。 当時はまだ小さく、街の電気屋というイメージの「エレクトリカル」をあそこまで大きくしたのは先生らしい、先生は社長に拾つてもらつた恩を必死で返そうと、朝も早くから、夜も寝ずに日々工場で働き続けた。 その働きぶりを社長は街の飲み屋で、あまりにも毎晩自慢するものだから、街の誰もが知る存在へとなつていた。 そんな先生に社長は惜しみなく技術を伝え、元々才能があつたのか、それに応えるように先生は多くの発明と特許を獲得した、社長が亡くなつた後、誰の反対もなく先生は次期社長へと選ばれる、先生は若干30の頃だつた。 それを機に、経営の才能もあつたのだろう、「エレクトリカル」は世界へと羽ばたいて行く。 社長から会長へと名称が変わるころ、最早この街では先生の存在は英雄となつていた。

「でもね、そんな英雄も60を迎え引退したの」

先生の歴史は本当にすごく、まるであの電気屋で見っていたアニメのようにそのストーリーに飲み込まれていた。

「みんな引きとめたわ、でも先生の意志のは固く、結局は、老いぼれを引きとめている暇があったら一人でも多くの若者を育てなさい、って言って会社を去って行ったらしいわ」

「じゃあ先生はその時からここで？」

涙も乾き、誇らしげに語ってくれるお姉さんの笑顔は、良かった、お姉さんも先生の事を好きだったんだと安心させてくれた。

「それもあるけど、その前に元々趣味だった絵とモノ作りの為に、先生はもらった退職金であの美術館とひとつの農園を造ったの」

「先生らしいや」

先生はきつとこの街が大好きなんだろう、自分を救ってくれたこの街の為に何かしたくて、似顔絵だってそう、みんなの笑顔の糧として立派にこの街の役に立っていた。でも、

「農園なんてありましたっけ？」

俺もこの街をよく探索した方だけど、家庭菜園レベルらしきものならまだしも、農園と呼ばれる程のものは見たことがないし、四六時中ここにいた先生がいつその農園の世話をしていたんだろう。

「うふふふ、それはジャン君が一番よく知っているはずよ、よく思い出してみて」

そんな事を言われても、俺がもし農園を見つけたら何個か拝借する計画を立てるはずだし、「あっ」ウソだろ、でもそんな俺の顔を見て、お姉さんは正解、と指を使ってジェスチャーしている。でも、そうだとして何で。

「何で先生と私がその事を知っているの？って顔ね」

「実は先生とあなたは出会っているの、あのオレンジ畑の小屋で、そんなはずはない、あの時の俺は周囲を警戒する事を怠らなかつた。人影なんて一度もなかつたし、言っちゃ悪いが老人なんかに出し抜かれる程じゃ。」

「ジャン君はその時寝ていたらしいから覚えてないのも無理はないわ。オレンジ畑だって放置はしないわ、ちゃんと警備装置もつけてあったし、それにジャン君が引っ掛かり、先生はすぐさま向か

ったの。でも着いてみたらポロポロの子供が一人小屋の端で小さく丸まっている。それを先生は自分の昔の姿とに被せたのね。その晩の内に一緒に来た警備員に装置を全部外させたみたい。そう、あなたの為に」

2年間一度も主が来なかったのはそういうわけだったんだ。

「だからね、先生は嬉しかったみたい、あなたがこの街にたどり着き、自分の前に現れた時。自分の趣味で一人の子供を救えた事が、そしてその子供が自分の横で必死に生きようとしている姿が。」

あなたの自慢話をする先生の顔は本当に幸せそうだったわ」

気が付いたらペンとスケッチブックを置き、走りだしていた。

後ろから、まだ今日は病院にいるからお姉さんは手を振ってくれた、その顔は笑ってた。俺は逃げていたのかもしれない、大好きな尊敬する先生が死んだなんて現実から。行けば迷惑？そんな事どうだっていい、もし今日先生に花を手向けられないなら、それこそ本当に大馬鹿野郎だ。さっきまででなかった分を取り戻すかのように、涙は自分の後ろ、走りぬけた道をずっと付いてくる。エレベーターなんてまどろっこしい、階段を駆け上がり病室のドアを大きく開けると、多くの人が先生を囲んでいた。それをかきわける様に進みベッドの最前列へと立つ。（何だよいつもの先生と変わってないじゃないか、ハハッお姉さんもみんなも早とちりだな）その顔はとても安らかに眠っているようだった。

「あなたがジャン君ね」

隣に座っていた優しくそうなおばあさんが俺の名前を呼ぶから、止まらない涙を袖で拭ってうなずく。

「主人からよく聞いているわ、あなたの事。本当、聞いていた通りとてもいい子ね」

ゆっくり優しく話すおばあさん、その一言に泣き崩れそうになるのを我慢して、唇を噛みしめては手に持っていた、公園で摘んだ名もなき花を一輪、先生の胸の上に置くのをみんな見守っていてくれた。

「先生、ありがとうございます」

震えた声でそれだけ告げると病室を離れる。そんな薄情な俺をおばあさんもまた、笑顔で送りだしてくれた。行きとは違い名残惜しく病院を離れる自分に、喝を入れられるのは自分しかいなかった。もう拭くところがない袖で。また目をこすると、走りだす、美術館へと。

コンテスト会場に着くと陽が少し落ちてきていた。（やばい、急がないと）中に入ると、前来た時よりは多いが、自分と同じ歳くらいの子とその親であふれていた。みんなきつとそうなんだろうな。受付に名前を告げコンクリートの部屋へと案内される。コンクリート初日の今日から1週間は、前と違い全員の絵が飾ってある。

各絵の下に貼ってある札の色によって発表がされる、大賞はゴールド、特別賞はシルバーが。でもその発表は残酷なもので、入って1番目の前に飾ってある絵にゴールドやシルバーが付いていた。

そこに自分の絵はない。ゴールドが付いている絵は、この美術館をモデルに描いてある絵だ。審査員じゃなくてもわかる、これは俺の絵より上だ、先生の言っていた価値観の違いとはまた違う。

明らかに俺の絵より人に訴えるものを持っている。くやしけれど、それでも俺は今させるもの出したんだ。最後に、その華やかな場所から離れた自分の絵を見に行こう。100枚はあるだろうが、1枚1枚見る時間はないが、自分の絵を探すのにちよつとてこずるくらい多くの絵が飾ってあった。ようやく見つけると、それは1番奥の壁に貼りつけてあった、もちろん下に札は貼られていない。

改めて見てみる。うん、自分の生きた証としては十分だ。久しぶりに見た先生の顔はいつもより優しくキレイな笑顔だった。（先生ありがとうございました。おかげさまで俺は最後に人間として人生を過ごせたと思います。きつと先生に出会わなければ、俺は誰の目にも触れることなく死んでいたはずでした。この絵はコンクリートが終わればなくなるでしょう。でもたったそれだけで

も、誰かが見ていてくれれば、それだけで、僕はこの世に生まれてきて良かった。()

さつき言えなかった言葉を自分の描いた絵に語りかける、親不孝者もいい所だ。

それでは先生、俺は行きます。説教はまたあとで。

「ちよつと遅かったが約束通り来たな」

リーダーは前と同じように箱の上に座り、見せつけるようにナイフを回していた。

「遅れたのはすみません、ちよつと色々あって、でももう大丈夫です」

今のが最後の言葉なのか、もつとかつこつけても良かったかな。でももうそんなのどうでもいい。俺は自分の中でかつこいい事をやり遂げたんだ、もう悔いはない。

前と同じ様に俺を囲むが、前と違うのが1人。俺と同年くらいのおいつだ。憎たらしい笑顔で俺の後ろに立つが、元より逃げるつもりはない、ポケットに手を入れ、お守りの入った袋を握り締める。自分から前に出る俺に、同じ速度でナイフを構え歩んでくるリーダー。リーダーの顔がハグをするほど近づいた瞬間、「これでお前は死んだんだ、もう2度と俺らの世界には来るな」、小さく俺だけにささやくリーダーの声、(来るな、と言われてもなあ)冷たい物が腹を貫く、(何だ思ったより痛くないな、これならまだポコポコにされたあの時の方がきつかったや)その場に膝をつき腹を抱えるように倒れこむ。手には生温かい感触、3人が去っていく足音がやけに小さく感じた。目もボヤつとしている。それは眠るように穏やかな気持ちで目を閉じていた。(・・・もう何もないや・・・)【ゴキブリ】の最後にはピッタリだった。

「知っているかい？この街には世界に名を轟かせた人が二人もいるんだよ」

街のメイン通り、小さい孫の手を握り、歩く老人は優しく問いか

けていた。

「知らない」

「そうかそうか」

そっけない態度を取る孫におじいさんはまた優しく語りかけた。

「一人はお前の好きなテレビが売っている電気屋さんのスミス先生、この街を豊かにしてくれた人だよ」

「あー知ってるー、エレクトリカルでしょ、でっかいもん」

「そうかそうか」

「もう一人はな、この街の、ほらそこにいらっしやる、美術館の偉い人のジャン先生じゃ」

「それも知ってるよ、ジャンせんせい」

その子は手を離すと、目の前にいる少しシャレたセンスの中年の男に、手を振って近づいていく。

「ジャン先生今日も絵を教えてください」

「もちろんいいとも」

私は生きていた。あの後目が覚めると病院のベッドの上にいた。あの世とは随分明るいものだど、起き上がると、腹が痛む、それに腕からは見たことのあるチューブが。（まさか病院？）周りを見渡すと横に人影、お姉さんが椅子の上でコックリコックリと寝ていた。異変に気づいてお姉さんが目を空け、こっちを見るなり抱きついてきた。

「ちよっちよっ」と

「よかった、ジャン君、ほんとよかったー」

今思えばもつたいたないが、余りの事に思わずお姉さんを引き離し、事情を聞いた。

どうやらお姉さんは、何となく私の様子がおかしいのを気にかけて、あの日付いてきてくれていたみたいだ。路地裏で友達（？）と話しているのを見てしばらく離れていたら、友達が出て行くのを見たが、私が一向に出てこないのを不思議に思い、確認しに行った

時発見し、救急車を呼んでくれたみたいだ。

それからは何があった？という質問攻めにあつたが、いづつもりはなかった。警察は所詮ストリートチルドレンのやること、とすぐに納得し消えてくれたが、お姉さんはしつこかった。最後には警察にはいわないという約束で話したら、案の定殴られた。しかも2回。1回は先生の怒りの分らしい。まだあの世で説教くらつてた方がよかつたかも、という私に、お姉さんはまた怒つた。

退院の日、血のついた上着は捨てられていたが、ズボンはそのまま取っておいてくれたので、お守りがちゃんとあるかポケットに手をつ込む、よかつた、あつた。着替え終わると医者が最後の説明をしてくれた。

「もともと死ぬほどの傷じゃないのに、これだからお前らみたいなのは・・・」

嫌みなその医者言葉には、今となつてはむしろ感謝している。

すぐに悟つたよ。一人だと思つていた私は、いろんな人に生かされているんだと。お姉さんやリーダーとの約束通り、私はその日から生きる事にした。

人として夢を持ち、その夢を追いかけ、気付いたら、ただのストリートチルドレンだった私を、世界の巨匠と呼んでくれるまでに。

その成果を買ってくれた街の人の推薦で、今は先生の残してくれた美術館で館長をしている。自分の作つた誕生日も今年で40歳になる。まだまだ先は長い。でもきつと素晴らしい人生が待っているんだらう。(先生、説教はもうちょっと待っていてください)

ポケットに入れた、もう粉すら見当たらない袋をにぎっては誓つ。

【ゴキブリ】よ僕は生きるぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3411s/>

ゴキブリ

2011年4月10日00時14分発行